在宅療養を考える集い

「在宅看取りを考えるシンポジウム」（昨年３月開催）に続く

～みんなで考える～　パートⅡ

幸せな最期を迎えるために・・・

みんなで見守る地域社会が必要です！！

「在宅療養を考える集い」は、そのために不可欠な

「おせっかいのすすめ」です！！

みなさん一緒に考えましょう！！

報　告　書

三　浦　市

平成２７年３月

＜ 目　　次 ＞

Ⅰ　プログラム ..... － 1 －

Ⅱ　来場者数 ..... － 2 －
　１　全来場者数 ..... － 2 －
　２　来場者数内訳 ..... － 2 －

Ⅲ　主催者あいさつ ..... － 4 －
　１　三浦市長　吉田英男 ..... － 4 －
　２　三浦市医師会副会長　矢島眞文 ..... － 4 －

Ⅳ　リレー講演 ..... － 5 －
　１　兒玉　末（三浦市立病院内科医師・地域医療科担当医長） ..... － 5 －
　２　安藤麻由美（三浦市立病院地域医療科社会福祉士） ..... － 10 －
　３　福島友美（三浦市社会福祉協議会地域包括支援センター社会福祉士） ..... － 13 －
　４　吉本ゆりえ（介護支援オフィス三浦管理者・主任介護支援専門員） ..... － 16 －
　５　澤口大輔（三浦市保健福祉部高齢介護課グループリーダー） ..... － 19 －
　６　リレーランナー全員が手を取り合って ..... － 24 －

Ⅴ　パネルディスカッション ..... － 25 －
　１　＜プロローグ＞永井雅子（神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長） ..... － 25 －
　２　笹谷月慧（三浦市民生委員・児童委員連絡協議会会長） ..... － 25 －
　３　熊谷末男（三浦市老人クラブ連合会会長） ..... － 26 －
　４　髙橋米子（訪問介護　ロード　管理者兼サービス提供責任者） ..... － 27 －
　５　ディスカッション ..... － 28 －
　６　＜エピローグ＞永井雅子（神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長） ..... － 30 －

Ⅵ　質疑応答概要 ..... － 31 －

Ⅶ　閉会 ..... － 32 －

Ⅷ　アンケート結果 ..... － 33 －
　１　司会者が直接会場の観衆に問いかけるアンケート ..... － 33 －
　２　事前準備した用紙によるアンケート ..... － 36 －

Ⅸ　編集後記 ..... － 40 －

「在宅療養を考える集い」～みんなで考える～シンポジウム　～おせっかいのすすめ～

Ⅰ　プログラム

日時：平成２７年３月７日（土）14:00～16:05

場所：三浦市民ホール（うらり２Ｆ）

主催：三浦市

共催：三浦市医師会・神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター

主管：三浦市立病院

プログラム

１　開　　会　　14:00～14:05

２　主催者あいさつ　　14:05～14:15

三　浦　市　長　　吉　田　英　男

三浦市医師会副会長　　矢　島　眞　文

３　リレー講演　　14:15～15:05

テーマ：在宅療養を考える　～「おせっかい」のすすめ～

講　師：三浦市立病院　地域医療科担当医長　　兒玉　　末

三浦市立病院　地域医療科社会福祉士　　安藤麻由美

三浦市社会福祉協議会　地域包括支援センター職員　　福島　友美

介護支援オフィス三浦　管理者・主任介護支援専門員　　吉本ゆりえ

三浦市保健福祉部高齢介護課ＧＬ　　澤口　大輔

４　休　　憩　　15:05～15:15

５　パネルディスカッション　　15:15～15:55

テーマ：「みんなで見守る地域社会をはぐくむ」

コーディネーター：永井雅子（神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長）

パネラー：笹谷　月慧（三浦市民生委員・児童委員連絡協議会会長）

熊谷　末男（三浦市老人クラブ連合会会長）

髙橋　米子（訪問介護　ロード　管理者兼サービス提供責任者）

兒玉　　末（三浦市立病院　内科医師・地域医療科担当医長）

安藤麻由美（三浦市立病院　地域医療科社会福祉士）

福島　友美（三浦市社会福祉協議会　地域包括支援センター職員）

吉本ゆりえ（介護支援オフィス三浦　管理者・主任介護支援専門員）

澤口　大輔（三浦市保健福祉部高齢介護課ＧＬ）

６　閉　会　　15:55～16:00

三浦市立病院　総病院長　　小　澤　幸　弘

Ⅱ　来場者数

１　全来場者数

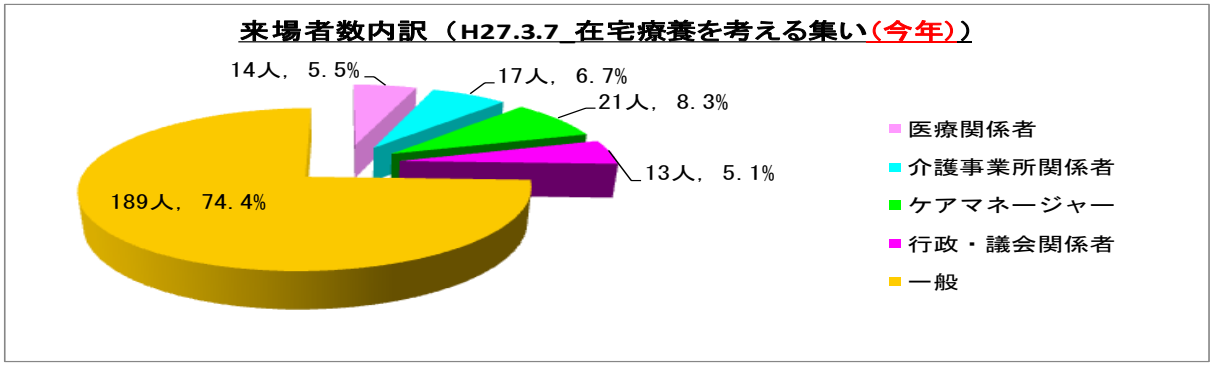
公表来場者数：約 300 名（このほか約 40 名のスタッフが参加、会場はほぼ満員状態であった。）

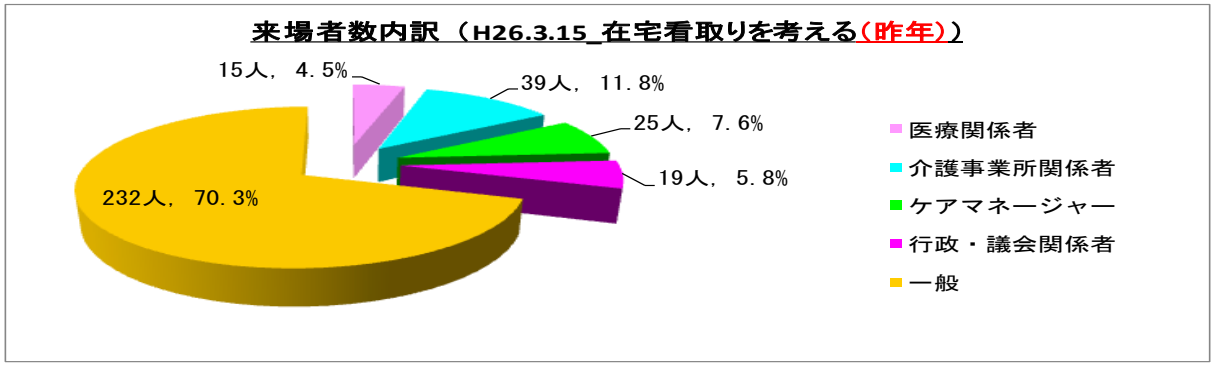
２　来場者数内訳

※受付で記帳された来場者を集計しているが、記帳せずに来場された方もおり、公表数値には合わない。

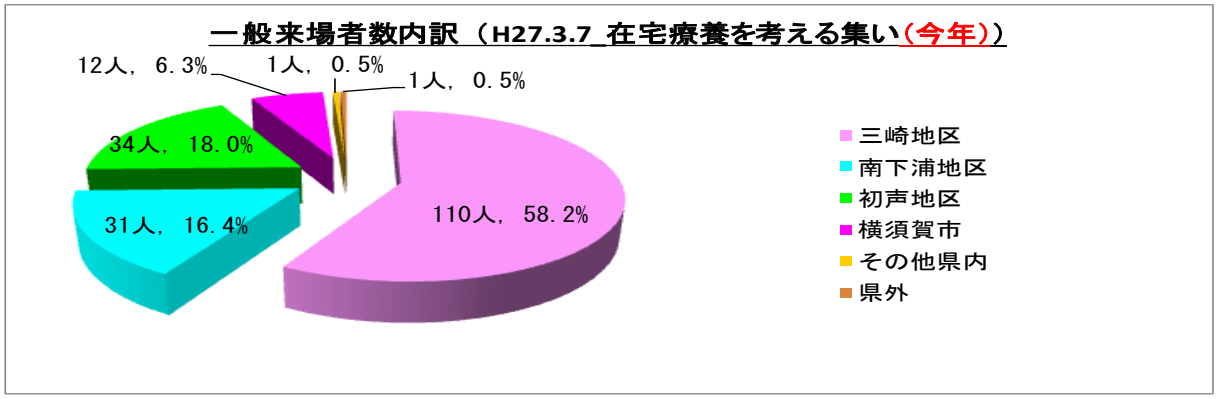
区分			H27.3.7 在宅療養を考える		H26.3.15 在宅看取りを考える		差引		
			来場者数	構成比	来場者数	構成比	来場者数	増減	構成比
1	医療関係者		14人	5.5%	15人	4.5%	△ 1人	△ 6.7%	＋ 1.0
2	介護事業所関係者		17人	6.7%	39人	11.8%	△ 22人	△ 56.4%	△ 5.1
3	ケアマネージャー		21人	8.3%	25人	7.6%	△ 4人	△ 16.0%	＋ 0.7
4	行政・議会関係者		13人	5.1%	19人	5.8%	△ 6人	△ 31.6%	△ 0.6
5	一般		189人	74.4%	232人	70.3%	△ 43人	△ 18.5%	＋ 4.1
	居住地域	三崎地区	110人	58.2%	120人	51.7%	△ 10人	△ 8.3%	＋ 6.5
		南下浦地区	31人	16.4%	45人	19.4%	△ 14人	△ 31.1%	△ 3.0
		初声地区	34人	18.0%	32人	13.8%	＋ 2人	＋ 6.3%	＋ 4.2
		横須賀市	12人	6.3%	20人	8.6%	△ 8人	△ 40.0%	△ 2.3
		その他県内	1人	0.5%	15人	6.5%	△ 14人	△ 93.3%	△ 5.9
		県外	1人	0.5%	0人	0.0%	＋ 1人	－	＋ 0.5
		小計	189人	100.0%	232人	100.0%	△ 43人	△ 18.5%	＋ 0.0
合計			254人	100.0%	330人	100.0%	△ 76人	△ 23.0%	＋ 0.0

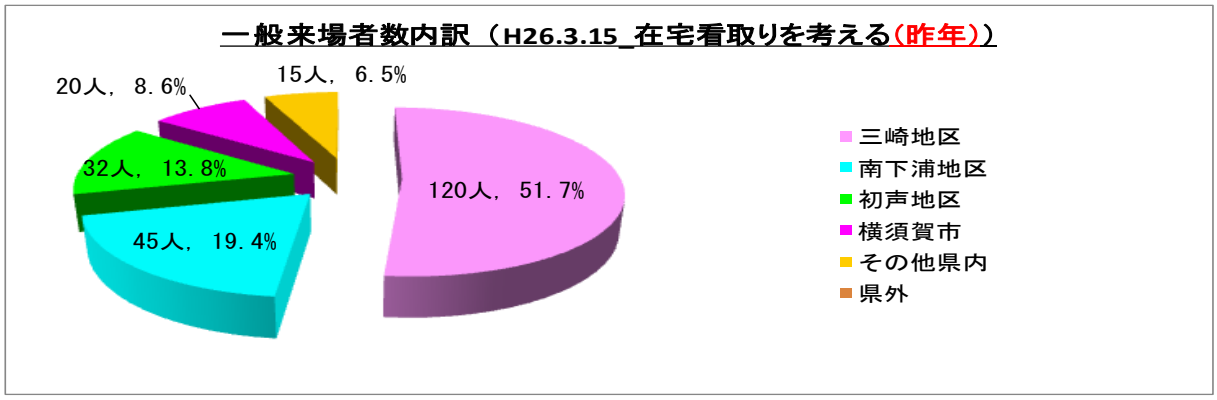
来場者数は、昨年３月１５日（土）に開催した「在宅看取りを考える」～みんなで一緒に考える～シンポジウムに比べると 76 人、23.0%の減となったが、好天に恵まれた昨年に比べ、小雨交じりの寒い中で開催されたことを考慮すると、成功であると評価をいただく声が多く、ご自分が人の手を借りなければ生活できない将来への備えについての住民の意識の高さが伺える。





来場者数内訳の構成比を昨年と比較すると、医療関係者や介護事業関係者の減少と一般来場者の増加が認められる。本年も市内全介護事業所への訪問など、関係機関への積極的な広報に努めたが、今後は、関係機関への広報の手法について工夫をし、より多くの参加を促す必要があると思われる。





一般来場者数の地域別構成比をみると、昨年も今年も三崎地区の来場者が半数を超えており、会場の地理的要因が大きく影響しているものと推察される。また、横須賀市以外の県内から昨年は 15 人の来場をいただいていたが、本年は県外からの来場者を含め２名にとどまっており、ホームページほか広域に広報できるツールの有効活用を図る必要があると思われる。

Ⅲ　主催者あいさつ

１　三浦市長　吉田英男

県下 19 市で高齢化率が最も高い本市にあって「在宅療養」を市民みなさんで考えることには大きな意義がある。高齢化率が高いこと自体が悪いわけではなく、むしろ住みやすいまちであることの証明でもあるので、高齢化率が高くても住みやすいまちであることを目指したいと考えている。

そのために在宅療養が安心してできる環境をつくる必要があり、医師会、介護事業所、行政、病院の連携をさらに強め、「あったかいまち」三浦をつくりたいと考えている。本日ご参加のみなさまにあらためて御礼申し上げ、今後も在宅療養を推進する気運を高めていただくようお願いする。

２　三浦市医師会副会長　矢島眞文

厚労省は在宅療養推進のため様々な施策展開をしており、医師会にも様々な情報が提供され、施策展開が迫られている。また、平成 27 年度は、医療法と介護保険法の改正などの岐路にあり、一生懸命に制度に関する勉強もさせていただいている。医療も介護との連携なしでは成り立たない時代が来ており、在宅療養支援診療所の充実などを推し進めるとともに、超高齢社会にあって、医療と介護の連携の強化に引続き取り組んでいきたいと考えている。そうした中、昨年に続く今日のシンポジウムの意味は大きく、三浦市医師会としても、可能な限りみなさまと連携をし、市民と手を取り合い、「三浦ならでは」の在宅療養の環境整備に尽力したい。

Ⅳ　リレー講演

今年の「在宅療養を考える集い」～みんなで一緒に考える～シンポジウムのテーマは、「おせっかいのすすめ」であり、在宅療養を支える５人のキーパーソンがリレー形式で講演することとした。

１　兒玉　末（三浦市立病院内科医師・地域医療科担当医長）

三浦市立病院にあって 24 時間 365 日の診療体制を支えるトップバッター、兒玉末（こだま　こずえ）先生に司会からバトンが手渡され、リレー講演の始まりです。

在宅療養を考える
～「おせっかい」のすすめ～
リレー講演のスタートに当たって
三浦市立病院　内科・地域医療科
医師　兒玉　末

三浦市立病院の兒玉末（こだま　こずえ）です。よろしくお願いいたします。

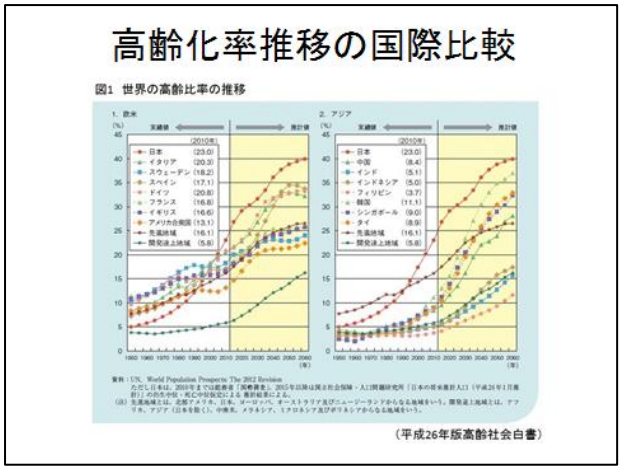
最近、「超高齢社会」とか、「超高齢化」とか、よく耳にしますが、平成 26 年１月１日現在の高齢化率を見てみますと、

全国 25.2%、神奈川県は 22.5%。横浜は 22.3%、横須賀 28.1%、そして三浦は、「33.2%」。

超超高齢社会です。

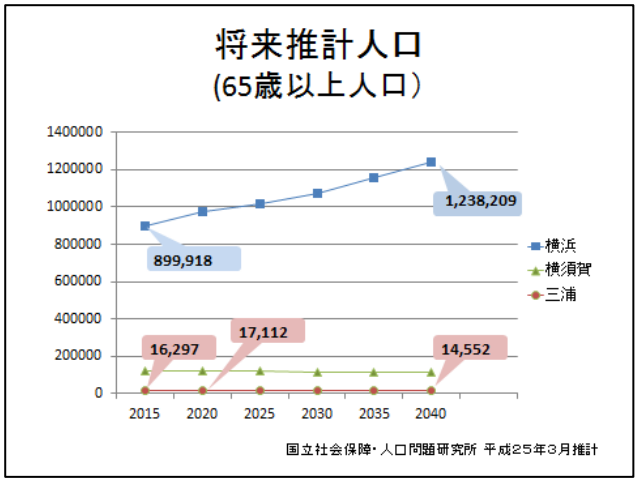
「超高齢社会」
高齢化率:65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合
7%以上-14%未満:高齢化社会
14%以上-21%未満:高齢社会
21%以上　　:超高齢社会

高齢化率(平成26年1月1日現在 神奈川県人口統計調査)
全国　25.2%
神奈川県　22.5%
横浜市　22.3%
横須賀市　28.1%
三浦市　33.2%



高齢化率推移の国際比較です。

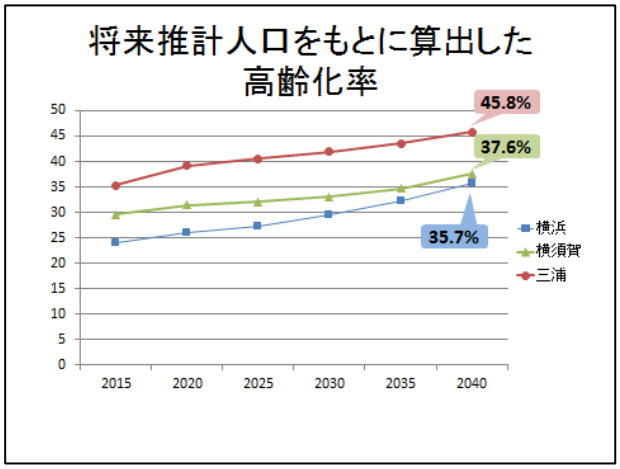
日本は、他に類をみない速さで高齢化を成し遂げました。これには、医療技術の進歩や、食事、生活習慣等が関係していると思われますが、日本特有の、「支え合う文化」、「高齢者を大切にする文化」が成し遂げたものだと私は思います。日本はこれから、人類が経験したことのない社会を経験することになるわけです。世界各国が注目しています。



高齢者人口の将来推計です。

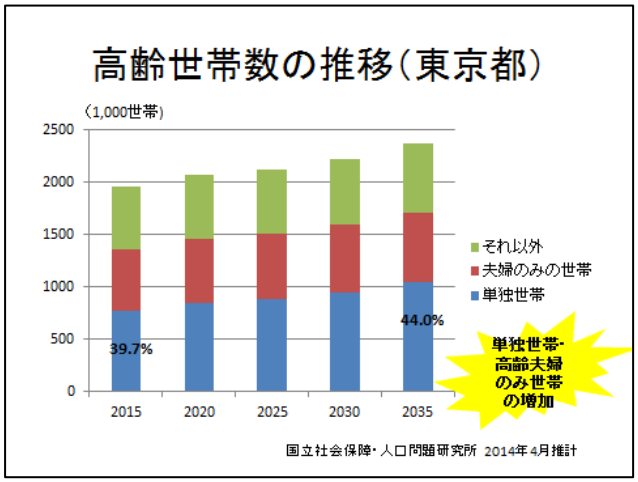
横浜は今後２５年間で１．４倍近くに高齢者人口が増加します。

一方三浦は、もうまもなく２０２０年にピークを迎えるようで、その後は減少に転じます。



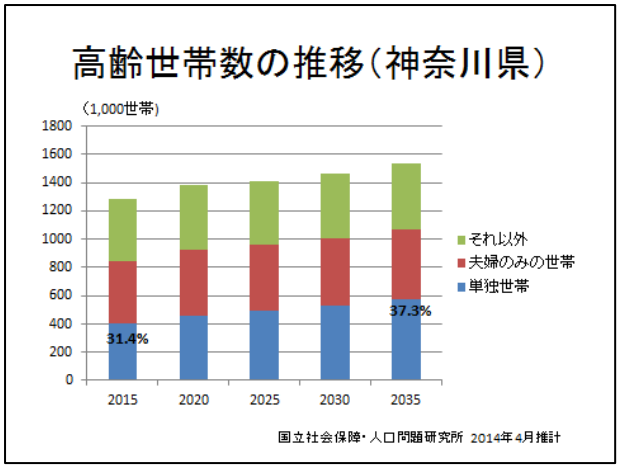
しかし高齢化率でみますと、２０４０年、横浜３５．７％に対し三浦４５．８％となります。

三浦は総人口、生産年齢人口も今後減少していきますので、少ない働き手で多くの高齢者を支えていかなければならないことになります。



また、こちらは高齢世帯数の将来推計です。

東京都は現時点でも単独世帯が高齢世帯総数の４割ちかくを占め、単独世帯と夫婦のみの世帯と合わせると７割になります。2035 年にはさらに単独世帯が増加し、44%にものぼる予想です。



神奈川県は、東京都よりは若干割合は減りますが、やはり単独世帯の割合が増加していきます。

さて、ここで・・・

Q. 死ぬならどっち？

A. ポックリ

B. ジックリ

質問です。死ぬならどっち？

A．ポックリ、B．ジックリ

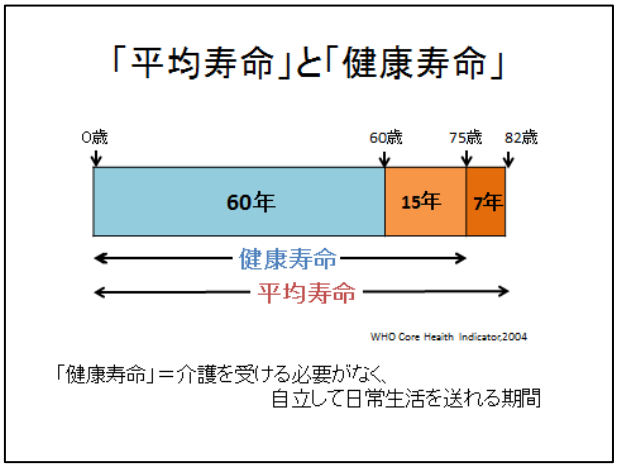
「ポックリ」を希望される方、ピンク色の方を、「ジックリ」の方、ブルーの方を、上げてください。

健康寿命（平均自立期間）

＝平均寿命－非自立期間（健康を損ない自立して生活できない期間）

この「7 年」の部分は人の手を借りなければ生きられない期間。

「ポックリ」逝くのであれば、ここは0年ということになるわけですが・・・



日本人の平均寿命と健康寿命
2013年

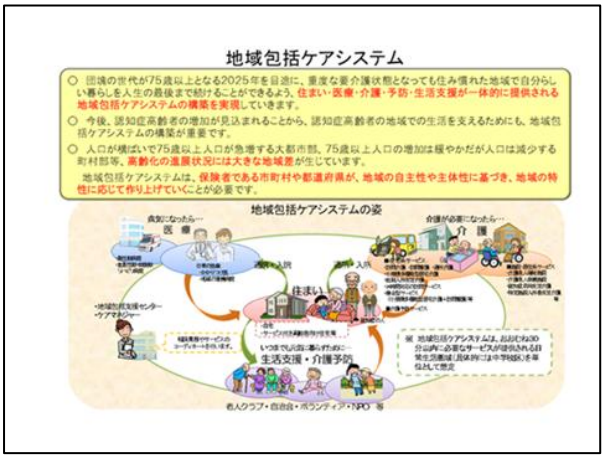
	健康寿命	平均寿命	差し引き
男性	71.19歳	80.21歳	9.02年
女性	74.21歳	86.61歳	12.4年

厚生科学審議会（健康日本２１（第二次）推進専門委員会　平成26年10月1日

なかなか「ポックリ」とは死ねないようです。

以上を踏まえて･･･

さて。以上を踏まえて、いったい私たちは何をどうしていけばよいのか。



近年、「地域包括ケアシステム」ということが言われています。

高齢者人口の増加に向けて、医療・介護だけでなく住まいや生活支援など地域が一体となって高齢者を支えていくための、システムを構築していきましょうというものです。

三浦市立病院での取り組み

- 訪問診療、訪問リハビリ、訪問看護
- 平成24年度・25年度「調査研究事業」:市内訪問看護ステーション、特養等施設、ケアマネージャー等との連携上の課題につき調査。
- 「公開講座」の実施:市内の医療・介護関係職を対象に年　回実施。
- 平成25年度「在宅看取りを考える～シンポジウム」
- 「地域包括ケア病床」開設:平成26年9月

病院も、その一端を担って取り組みを行っています。

＜三浦市立病院　四季折々＞

満開の河津桜と病院　夜景

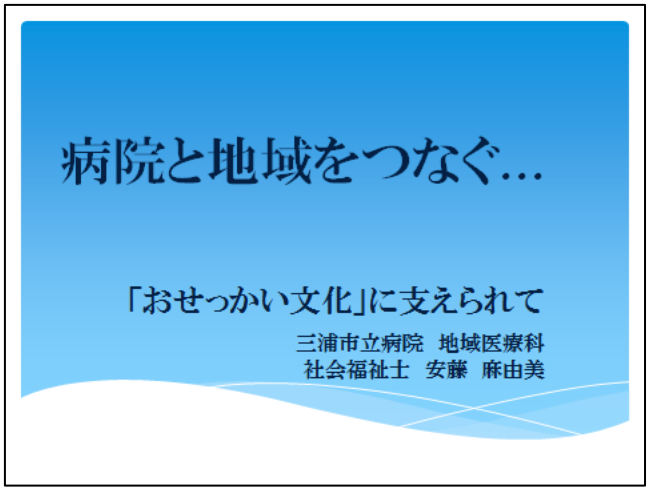
貫けるような夏空と病院

秋の夕日に映える病院

昨年の大雪と病院

２　安藤麻由美（三浦市立病院地域医療科社会福祉士）

兒玉先生から第２走者の安藤麻由美（あんどう　まゆみ）さんにバトンが手渡され、第２走者の講演が始まります。安藤さんは、市立病院と地域の介護現場をつなぐ重責を担う市立病院地域医療科社会福祉士として日々奮闘されています、

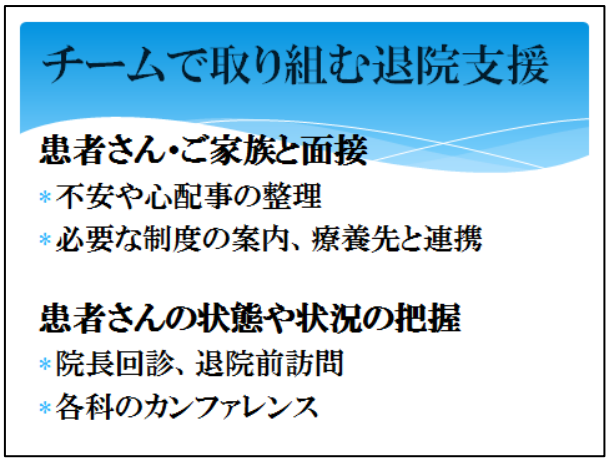


ご紹介いただきました、三浦市立病院で医療相談員をしております安藤です。

最近は一人暮らしや高齢者二人暮らしの方も多く家族や制度だけでは解決できないことも増えています。そんな時に大きな力を貸してくれる地域の方々の支援をご紹介します。

相談員の主な仕事は退院支援です。患者さんやご家族からお話を伺い、療養生活の不安や介護の心配事を整理し問題解決に向けて支援しています。

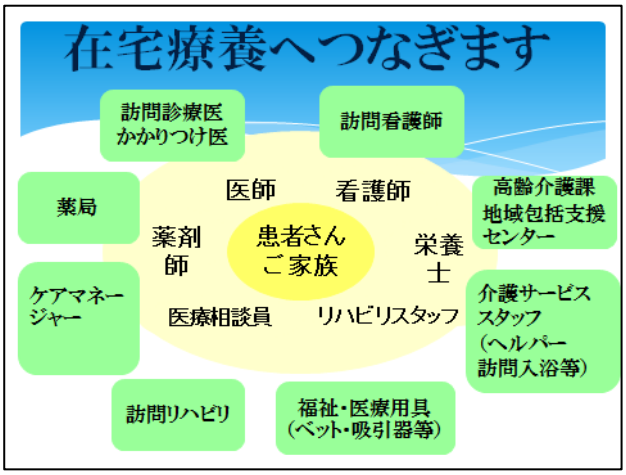
ですが、相談員一人で退院支援を行っているわけではありません。主治医、看護師、リハビリスタッフらと情報を共有し退院後の環境や生活に応じて関係者と連携しています。

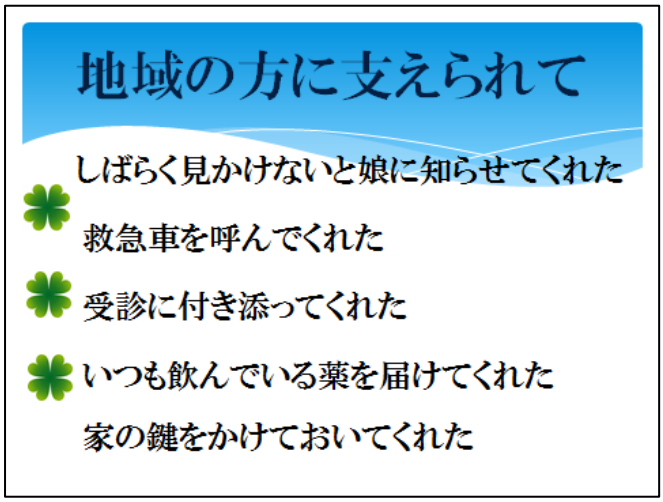


これは二年前のクリスマスイブの院長回診の様子です。患者さんの驚いたり喜んだ表情が忘れられません。

昨年のシンポジウムでは多くの方が住み慣れた町で在宅でご家族に看取られたいと願っていられました。ケアマネージャーを中心に介護サービス担当者を交えた話し合いを行い、連携することで多くの方がその願いをかなえていられます。

一方一人暮らしの方、身寄りのない方が療養を継続するには、ご家族や関係者だけでなく、地域の方の声掛けや見守り、助け合いを多く必要とします。





今までかかわらせていただいた中で地域の方に支えられたケースをご紹介します。患者さんやご家族からの言葉の一部です。病院へ薬を届けていただき既往歴やかかりつけ医を知る手掛かりになったり、戸締りをしていただいたおかげで無理な外出をしなくて済んだり、相談員としても助けられました。

ペットを飼われている方は多く、動物病院の調整をしたこともあります。一時的にケアマネージャーの事務所で預かっていただいたり、ペットの世話をしてくれる方がいるときはほんとに心強いです。また、相談員も退院前訪問にうかがうことがあります。アパートの前が急坂だったり、ゴミが散乱した室内といった環境に驚きますが、日常生活の困ったときにも助けていただいています。

地域の方に支えられて

- ペットの世話をしてくれた
- 雪かきをしてくれた
- 転ばないように片づけを手伝ってくれた
- ごみの処理を手伝ってくれた
- 布団や掃除道具をもらった

地域の方に支えられて

- 一緒に話を聞いてくれて落ち着けた
- 面接に付き添ってくれて心強かった
- 制度の手続きを教えてもらった

多くの方が利用している介護保険ですが、申請と契約によって利用ができます。わかりやすい説明を心がけていますが、寄り添ってくれる方がいるととても安心されます。

このように在宅療養には地域の方の支援が大きな力となっています。向こう三軒両隣の文化が残る三浦で、幸せな療養生活を過ごせることを願います。

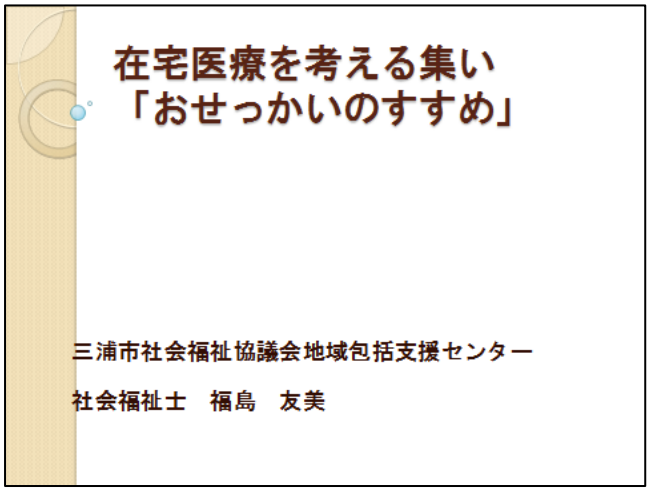
病院の河津桜も散り始めました。自然の中で暮らしていると命に限りがあると教えられます。家族や支援させていただいた方の死は悲しみが深く簡単に癒えません。それでも海を見て今日も漁に出ているのかなとか、畑から見える富士山に手を合わせているのかなとかその方々がよみがえって日々を大切に過ごそうと思えてきます。自然豊かな町で、地域に見守りや助け合いの輪が広がっていけば、三浦ならではの地域医療が確立できてくると考えます。

相談員として病院と地域をつなぐ架け橋の役割を果たせるよう支援していきます。療養生活での不安や心配事がありましたら、地域医療科までお気軽にご相談ください。

ご清聴ありがとうございました。

３　福島友美（三浦市社会福祉協議会地域包括支援センター社会福祉士）

第２走者の安藤さんから第３走者の福島友美（ふくしま　ともみ）さんにバトンが手渡され、第３走者の講演が始まります。福島さんは、三浦市社会福祉協議会地域包括支援センター職員として、高齢者を取り巻く様々な問題解決のための相談に対応しています。



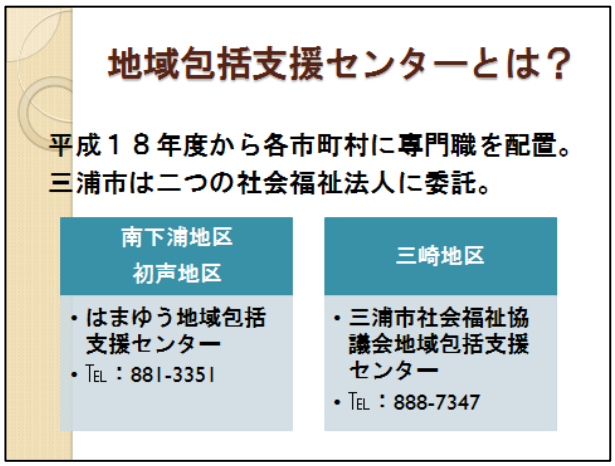
三浦市社会福祉協議会地域包括支援センターの福島友美（ふくしま　ともみ）です。

安藤さんからしっかりバトンを引き継いで、お話をさせていただきます。

始めに、地域包括支援センターの説明を簡単にさせていただきます。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、地域包括支援センターは、平成 18 年に制定された、地域の身近な高齢者相談窓口です。

三浦市は二か所の社会福祉法人に委託されて運営しております。



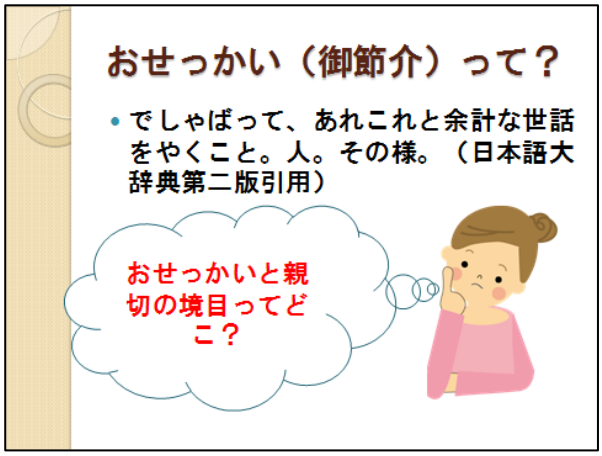
地域包括支援センターの業務は、高齢者にまつわるよろず相談的な機能の他にも、介護保険における要支援認定の方のケアプラン作成、

元気な高齢者向けの介護予防としてのサロンの開催、介護保険事業所向けの研修の企画、地域住民への啓発事業など、多岐にわたります。

包括支援センターは、業務を行うにおいて常に地域づくりという視点で携わっています。

介護保険制度が始まる前は、自然と地域で助け合いの仕組みができていました。

ですが、介護保険制度が始まり、仕事として専門職が関わるようになり、地域のお手伝いが離れていってしまいました。でも、介護保険制度で全てを賄うことはもちろんできず、ふたたび地域の力を求めるようになってきました。



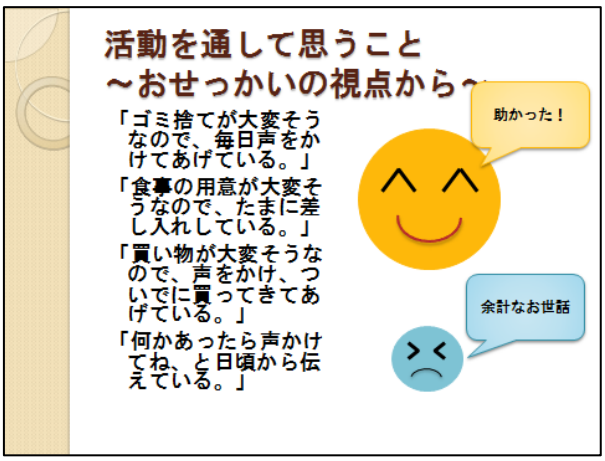
本日のテーマ「おせっかい」は、でしゃばり等あまり良いイメージの言葉ではありません。

公共広告機構のCMでおせっかいについてのCMがあるのをご存知でしょうか？

ある人にはおせっかいでも、ある人には親切になるという内容です。

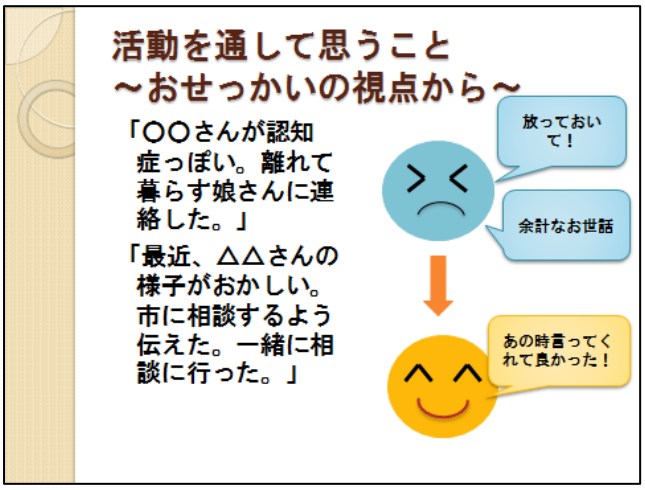
では、おせっかいと親切の境目はどこなのかな？と考えました。

同じことをしているのに、してもらった人によって受け取り方が違う。反対に、同じことをしてもらっているのに、してくれる人によって受け取り方が変わる。



日頃の活動を通して、地域の方の声を聞く場面がよくあります。

これは、本人が大変と自覚していることへのお手伝いはありがたい気持ちが大きく、余計なお世話と感じる方は正直少ないです。



このように、本人や家族に自覚がないことを言われる、手伝ってもらうことはおせっかいになる可能性が高いのではないかと思いました。

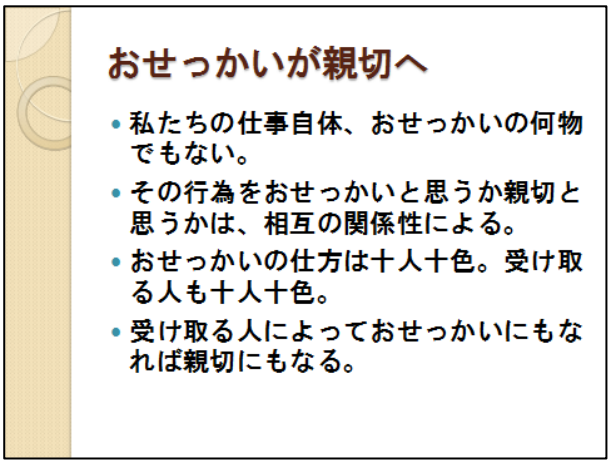
ですが、その場ではマイナスの感情があったとしても、関係性があればもしくは関係性が築けていければ、余計なお世話だったことも感謝へと変わっていくのだと思います

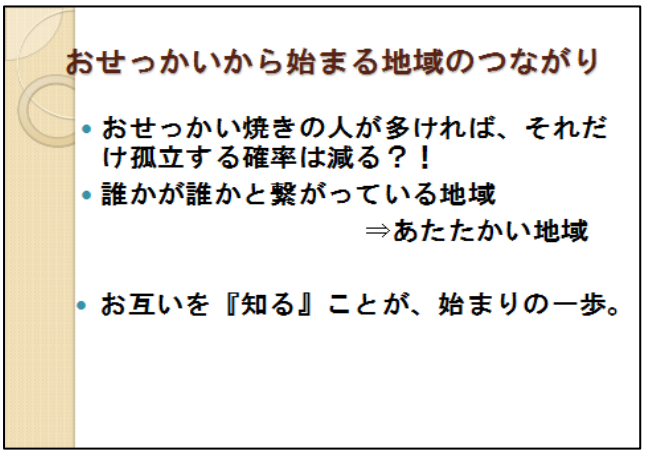
おせっかいが親切に変わるポイントは、お互いを知ることだと思います。

そもそも、私たちの仕事もおせっかいの何物でもないと思います。あーでもないこーでもない、あーしたらこーしたらとお話しする時もあります。その支援の仕方が良いかどうかは別として、仕事自体はとてもおせっかいなことでもあると思います。実際のお話は次にお話しされる吉本さんがして下さると思います。

おせっかいになるか親切になるかは、相互の関係によるのではないでしょうか。

おせっかいの仕方は十人十色。受け取る人も十人十色。すべてに受け入れられる訳ではないです。でも、それで良いと思います。それでも気にかけているというメッセージの発信が大事なのだと、私は思います。





誰かが誰かと繋がることができれば、その機会が多ければ多いほど孤立する人は少なくなるのではないでしょうか。誰かと繋がっていれば、そこから輪は広がっていくと思います。知った顔が多い地域はきっとあたたかい地域です。お互いを知ることが初めの一歩ではないでしょうか。

最後に、私が担当している方の言葉で終わりたいと思います。その方は、お一人暮らしなのですが、先日体調を崩して寝込まれました。近所の人が『大丈夫？』と声をかけてくれたそうです。特に何かしてもらった訳ではなく、声をかけてもらっただけです。

その方はこうおっしゃいました。『周りに迷惑をかけない様、一生懸命一人で生活してきた。でも、一人ではなく周りに支えられて生活しているんだ、生活できているんだと感じた。』とおっしゃいました。とても素敵な言葉だなと思い、紹介させていただきました。

以上で発表を終わります。
ご清聴ありがとうございました。

４　吉本ゆりえ（介護支援オフィス三浦管理者・主任介護支援専門員）

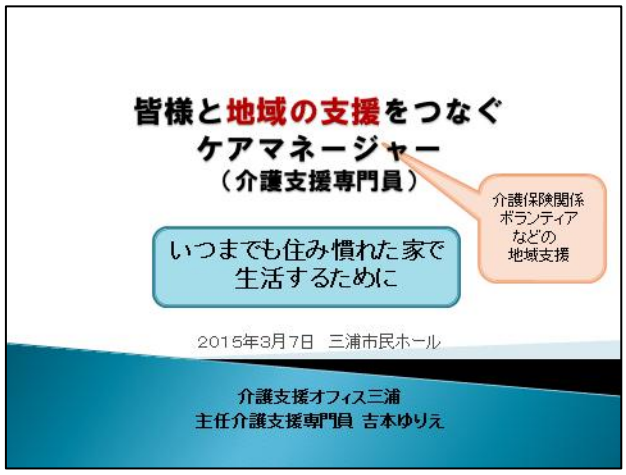
第３走者の福島さんから第４走者の吉本ゆりえ（よしもと　ゆりえ）さんにバトンが手渡され、第４走者の講演が始まります。吉本さんは、ケアマネージャーとして、介護が必要な人々の日々の暮らしを支えています。

みなさま、こんにちは！

福島さんからバトンを引き継いだ第４走者の吉本です。介護支援オフィス三浦にてケアマネージャーを行っております。

本日のリレー講演の基調テーマは「おせっかいのすすめ」ということです。

前のみなさまがそれぞれの立場でお話しくださいましたので、私は、ケアマネージャーとして「いつまでも住み慣れた家で生活するために」どのような形で「おせっかい」をしているか、と言うことをちょっとお話ししてみたいと思います。



ここ三浦で仕事をしておりますと、さすが三浦！と感じることのひとつに「まぐろ船」関係の仕事をしていた高齢者の方が大勢いらっしゃるということです。

何ヶ月間も遠洋で漁をしてこられたまぐろ船の方々とお会いしますと、どなたも寡黙で責任感が強く、ある意味大変頑固な方が多いと感じました。

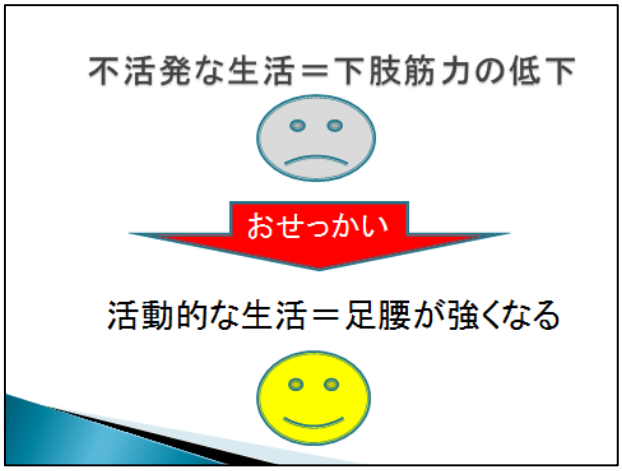
そういった方々は、人を助けることは得意でも、自分が他人の世話になるなんてことは、どうもお嫌いなようです。ところが、そういった方もだんだん高齢になりますと仕事を引退される時がやってきます。

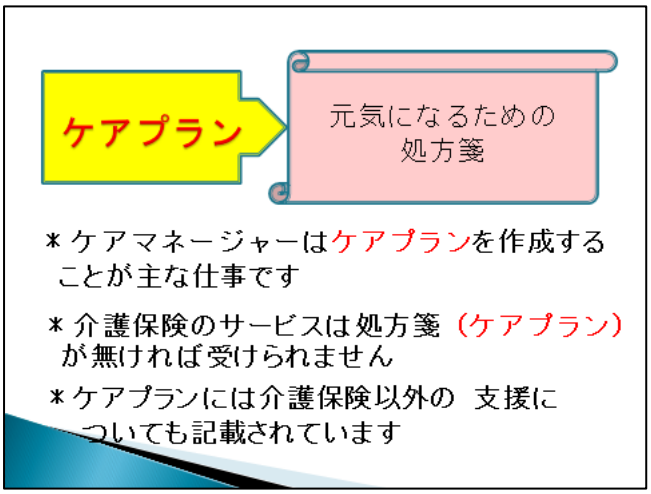
すると、徐々に外に出ることがなくなり、もともと無口な方が多いですから、家でじっとテレビを見てすごすことになります。

そして何か病気などで入院したりしますと、今度は更に足腰が弱ってしまいます。

退院するときになって、心配されたご家族が、地域医療科の安藤さんたちと相談します。そこで介護保険の利用を勧められ、地域包括支援センターが紹介されます。

認定調査が済み介護保険証が届きます。そこに介護が必要という意味の要介護１から要介護５までが記載されておりますと、ケアマネージャーの出番となります。





ケアマネージャーは先ほどのような方が、何に困っておられるのか、どのような生活をなさりたいかなどを詳しく伺った上で、必要と思われるサービスを一緒に考えます。そういった事柄をまとめたものをケアプランといいます。

例えば、足腰が弱ってきたことが心配なら「リハビリをしているデイサービスへ通ってみては如何ですか？」などと提案します。

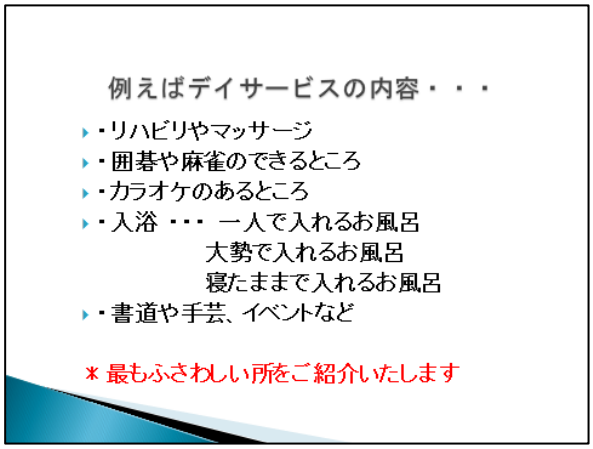
これがこの方にとっての最大のおせっかいのようなものですが、たいていの場合「そんな所は嫌だ」と一括されてしまいます。

ところでその方が思う「そんな所」とはどんなところなんでしょうか。

ご近所の方がデイサービスに行っていて歌ったり踊ったりしているらしい・・・と奥様が話していたのを思い出し、「俺が今さらそんなところに行って歌ったり踊ったりなどできるか！」と思われたのです。それは確かにごもっともなことです。

しかしデイサービスといっても実にいろいろなタイプがあるのです。

リハビリやマッサージを専門に行っている所。娯楽性の有る所。書道や手芸など趣味に特化した所など・・・私たちはそういった施設の特徴をお話しし、その方になるべく相応しいところをご紹介するようにしております。



さて、「そんなところには行かない」とおっしゃりながらも、最初はご家族に言われて渋々と参加された方が、その後どうなったでしょうか。

その方の場合はリハビリ仲間ができ、男性ですから闘志も湧き俄然張り切っておられ、余暇の時間には麻雀のお相手も見つかってその後も休まず通っておられます。

ご家族からは「楽しそうに参加しているし、何より元気になって良かった！」と言われるようになりました。

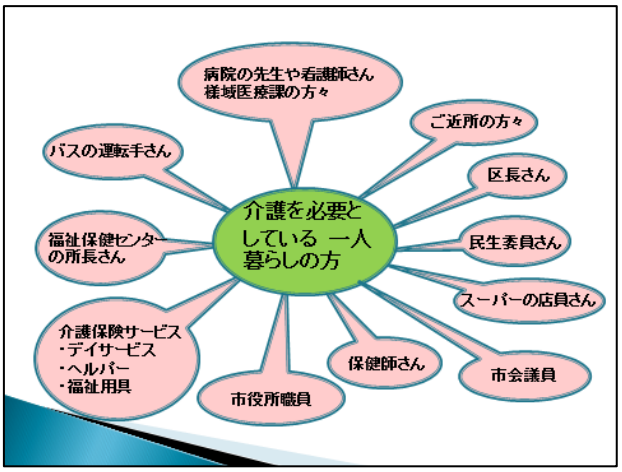
しかし、先ほどのように、ご家族がおられる方ばかりではありません。一人暮らしの方も大勢いらっしゃいます。

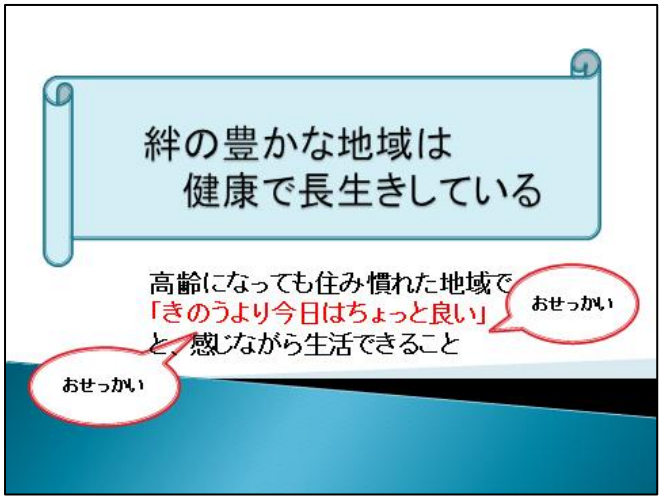
そのような一人暮らしの方の場合、今度はご近所の方のお力が不可欠となります。

実際私も、そのような方をたくさん担当しておりますが、民生委員さんやご近所の方に随分とお力を頂いております。

これはあるお一人暮らしの方の場合でしたが、実に様々な方のお力添えを得ながら生活をしておられました。介護保険だけをとっても、ヘルパーさんに来ていただいたり、ベッドのレンタルをしたり、一時的にショートステイを利用するなど多種にわたりました。

介護保険のサービスについては、一言ではお話しできませんので、お近くのケアマネージャーにどうぞご相談ください。





ある高名な先生は「絆の豊な地域は健康で長生きしている」と述べておられます。

本当にそのとおりだと思います。

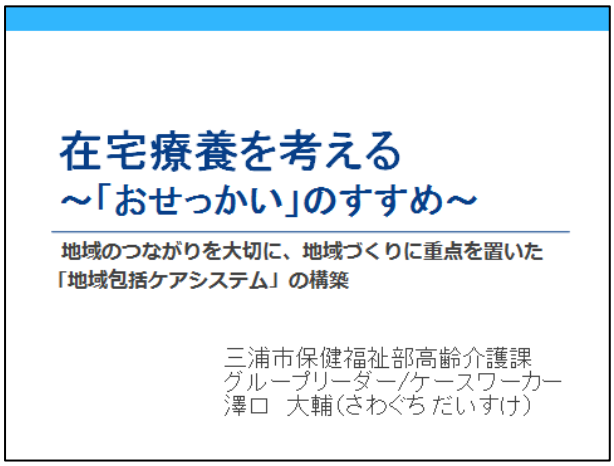
三浦市は高齢化率が県内でもトップクラスだそうです。ですからみなさまの周りにもこのような方が大勢いらっしゃるはずです。

どうぞ、みなさま方も大いなるおせっかいをなさることで、「きのうより今日はちょっと良い」と思っていただけるように、サポートをしていただきたいと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

５　澤口大輔（三浦市保健福祉部高齢介護課グループリーダー）

第４走者の吉本さんから最終走者の澤口大輔（さわぐち　だいすけ）さんにバトンが渡り、最終走者の講演が始まります。澤口さんは、三浦市保健福祉部にあって地域包括ケアシステムの確立を目指して頑張っています。



三浦市役所　保健福祉部高齢介護課の澤口大輔（さわぐち　だいすけ）です。

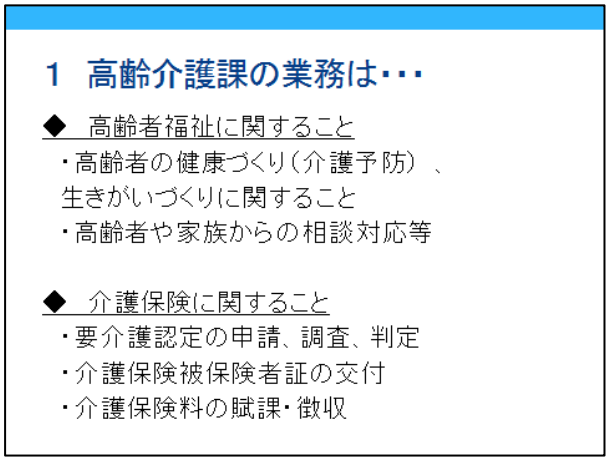
アンカーとして責任が重く緊張していますが、頑張ってお話をさせていただきます。

まずは講演の内容に入る前に、私が所属する高齢介護課の業務について簡単にご案内させていただきます。

その仕事は大きく分けると「高齢者福祉に関すること」「介護保険に関すること」の２つに分けられます。

まず「高齢者福祉に関すること」では、高齢者の健康づくり（介護予防）や生きがいづくりに関すること、高齢者の方やそのご家族からの相談など、高齢者福祉全般の業務を行っています。

「介護保険に関すること」では、要支援・要介護認定に関すること、介護保険の保険証の交付、介護保険料の賦課や徴収、その他介護サービス事業者との調整等を行っています。



なお、介護認定の手続きについて、よくお問合せがあります。まずは市役所の窓口で申請をしていただくことから、詳しくは高齢介護課まで遠慮なくご連絡ください。

２ 本日の講演内容

◆ 在宅療養を考える
～「おせっかい」のすすめ～

◆ 「高齢者をみんなで見守る地域社会」について考える

「三浦市の現状」「行政としての取組み」
などについてお話します。

それでは、本題に入ります。
今回、メインテーマは「在宅療養を考える」、サブタイトルは「おせっかいのすすめ」です。
パンフレットにもあるとおり、高齢者をみんなで見守る地域社会をどのように考えていくか、三浦市の現状を踏まえ、行政としての取組みなどについてお話しをさせていただきます。

３ 三浦市における高齢者の現状

◆ 三浦市の高齢化率

33．2％

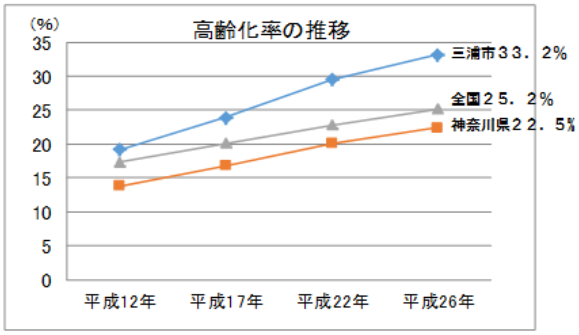
（平成26年1月1日現在）

三浦市民の3人に1人が65歳以上

まずは、三浦市における高齢者の現状についてお話しをさせていただきます。
三浦市の人口は、一方で６５歳以上の高齢者の人口は増え続けています。
平成２６年１月１日現在の三浦市の高齢化率は、３３．２％であり、市内の３人に１人が６５歳以上という状況でございます。

３ 三浦市における高齢者の現状

◆高齢化率の比較（三浦市、神奈川県、全国）



これは、神奈川県の平均２２．５％、全国平均２５．２％と比べても、高い水準です。
神奈川県内では真鶴町、湯河原町に次いで３番目、県内の市の中では第１位の高齢化率となっています。

３ 三浦市における高齢者の現状

◆ 2025年（平成37年）には･･･

三浦市の高齢化率は

40% を超える見込み

増え続ける高齢者を
地域で見守り、支え合うことが必要

また、団塊の世代が 75 歳以上になる 2025 年（平成 37 年）には、高齢化率は40%を超えると見込んでおり、増え続ける高齢者、特に１人暮らしや高齢者のみの世帯の方々を地域で見守り、支えあうことが、これから益々重要になります。

4　アンケート結果から見る在宅療養

◆　アンケート内容

日常生活圏域ニーズ調査等

◆　調査期間

平成26年2月7日～2月28日

◆　調査対象者

下記から　2，006人を無作為に抽出

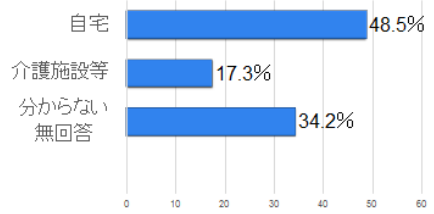
・65歳以上の一般高齢者

・要支援1～要介護2の認定者

次に、平成２６年２月に三浦市が実施したアンケート調査において、今回のテーマである「在宅療養」に関する調査結果がありますので、紹介させていただきます。

4　アンケート結果から見る在宅療養

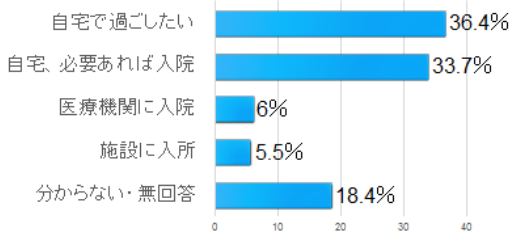
介護保険サービスを受けて生活する場合、どこでの生活を望んでいますか



「介護保険サービスを受けて生活する場合の生活場所」については、「自宅」と回答した方が全体の48.5%となっており、特養や老人ホーム等の各施設での生活と比べても、自宅での生活を望んでいる方が最も多いという結果でした。

4　アンケート結果から見る在宅療養

人生の最期を迎えるときが来た場合、どこで過ごしたいですか



また、「人生の最期を迎えるときが来た場合の生活場所」についても、「自宅で過ごしたい」という方が36.4%と最も多く、次に「自宅で療養して必要になれば医療機関に入院したい」という方が33.7%であり、全体の７割を超える方が、自宅での療養を望んでいるという結果でした。

4　アンケート結果から見る在宅療養

◆　アンケート結果では　**7割**　を超える方が自宅での生活を希望している

介護や医療が必要な状態になっても
安心して自宅で生活できる体制の整備が必要

このことから、介護や医療が必要な状態となっても、安心して自宅で生活できるような体制の整備が必要であると考えられます。

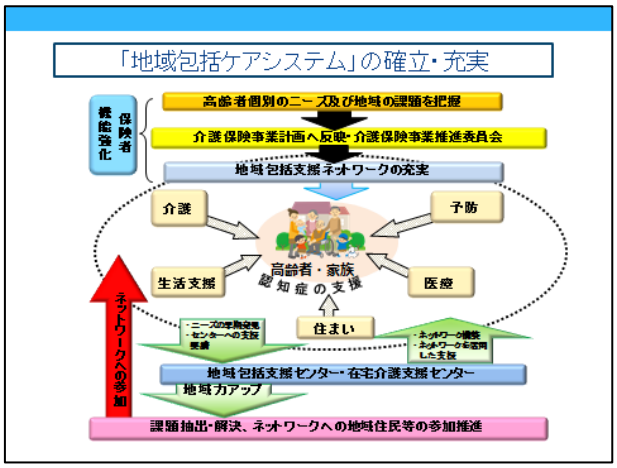
5 「地域包括ケアシステム」とは

◆ 高齢者が可能な限り住み慣れた地域で暮らし続けるられるよう、**地域全体で高齢者を支援する仕組み**のこと

◆ 具体的には、「介護」「医療」「予防」「生活支援」「住まい」に関する支援を一体的に提供する**地域づくりを進めること**

ここで、三浦市として取り組んでいる「地域包括ケアシステム」についてお話しします。

「地域包括ケアシステム」とは、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるようにするために、市町村が中心となって、介護だけでなく、医療や予防、生活支援、住まいを一体的に提供する地域の仕組みをつくることです。



このような地域の仕組みをつくっていくには、高齢者を支える関係機関との連携のほか、ご近所同士のつながりや地域での支え合いも重要となってきます。

そのために、行政としては、地域住民の方や関係機関の方との意見交換の機会を定期的に設け、高齢者を地域で支え合う仕組みづくりについて検討を進めています。

6 三浦市の取組状況と今後の目標

◆ 地域ケア会議とは・・・

・地域の関係機関や地域住民等が集まり、個別事例について検討

↓

「地域課題の共有」　「課題の解決」
「関係者のネットワーク」「政策形成」 等
に、つなげる

◆ 三浦市の取組み

・平成26年4月から毎月1回開催

最後に、三浦市として現在行っている具体的な取組みについてお話しします。

三浦市では、平成26年4月から「地域ケア会議」を毎月1回開催しています。

「地域ケア会議」とは、個別の事例について、地域における関係機関の様々な職種の方や住民の方などの間で検討を重ねることにより、地域の共通課題を共有し、課題の解決に向け、関係者間の調整やネットワークづくり、新たな資源開発、さらには政策形成につなげることを目的とした会議です。

平成25年度は、地域課題の抽出や「地域ケア会議」についての学習と開催方法についての検討を行った。写真は、出席者が地域の課題と感じていることをカラー別の付箋に書き出し、模造紙に張り付けたもの。

実際には、平成25年度から関係機関で集まり、地域課題の抽出や地域ケア会議の実施方法などについて検討や学習を行っていたました。

平成26年度地域ケア会議の様子

地域ケア会議のメンバーは、地域包括支援センター、在宅介護支援センター、三浦市立病院地域医療科、鎌倉保健福祉事務所三崎センター、市役所高齢介護課を中心として、その他、会議の議題により関係機関や地域住民の方にもお集まりいただいています。

また、年に２回、地域ケア会議の親会議にあたる「地域ケア連携会議」を開催し、介護サービスの事業所や老人クラブ、民生委員等、多職種が連携することにより幅広いご意見をいただき、様々な検討を行っています。

７　具体的な地域課題

◆　一人暮らしで身寄りがない高齢者
◆　認知症の高齢者　◆　高齢者虐待

平成27年1月27日に**「新オレンジプラン」**が公表。
認知症は増え続け、高齢者だけでなく
若年性認知症は30歳代から発症の事例もある。

◆医療や介護の専門職の支援だけでは困難な場合も

↓

地域のつながり・見守りが必要

具体的な地域課題としては、例えば、１人暮らしで近くに身寄りのない認知症の高齢者の方や、高齢者虐待といった深刻な問題も増えてきています。医療や介護の専門職の支援だけでは難しい場合もあり、民生委員さんやご近所の方にもご協力いただいて見守ることの必要性が増しています。認知症については、国においても重要な問題とされており、2025 年には５人に１人が認知症とも見込まれています。

８　おわりに

◆　今後も高齢化が進み、一人暮らしで近くに身寄りのない方や認知症の方も増えていくことが見込まれる。

◆　地域で困っている方、認知症などで理解が困難な方に対し、一人ひとりの「おせっかい」により、**地域全体で支え合う仕組みづくり**を目指す。

◆　地域包括ケアシステムの充実

最後になりますが、これからも高齢化が進み、様々な問題が出てくると見込まれます。

今こそ地域のつながりが大切となります。

まずは声をかけあい、地域包括支援センターや市役所に相談してください。

多くの方が「おせっかい」となることで、地域みんなで声をかけあい支えあう「あったかいまち」につなげるため、地域の仕組みを作っていかれるよう取り組んで参ります。

ご清聴ありがとうございました。

ご清聴、ありがとうございました。

６　リレーランナー全員が手を取り合って

様々な立場で在宅療養を支えるキーパーソン５人のリレー講演が終わったあと、全員が手を取り合って再登壇し、

「みんなで見守る地域社会」

を　はぐくむため、

いろいろな職種のいろいろな人が手を取り合って、これからも可能な限り、

「おせっかい」

していくことを誓いました！！

Ⅴ　パネルディスカッション

リレー講演の５人のほか、三浦市民生委員・児童委員連絡協議会会長の笹谷月慧（ささや　つきえ）さん、三浦市老人クラブ連合会会長の熊谷末男（くまがい　すえお）さん、訪問介護ロード管理者兼サービス提供責任者の髙橋米子（たかはし　まいこ）さんに加わっていただき、「みんなで見守る地域社会をはぐくむ」をテーマに、神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長の永井雅子（ながい　まさこ）さんにコーディネーターをお務めいただき、パネルディスカッションを行いました。

以下、発言要旨をまとめます。

１　＜プロローグ＞永井雅子（神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長）

第１部のリレー講演のみなさま、ありがとうございました。今日のパネルディスカッションのテーマは「みんなで見守る地域社会をはぐくむ」ということですが、キーパーソン５人の日頃のご活躍により、高齢者を見守る地域の連携が育まれていることがよく分かり、心強く感じました。また、そのほかの方の中にも、たくさんのキーパーソンがいらっしゃいますが、そのなかで地域の現場において様々な分野でご活躍の３名の方に加わっていただき、日ごろのご活躍の一端をご紹介いただきます。

２　笹谷月慧（三浦市民生委員・児童委員連絡協議会会長）

ご紹介をいただきました、三浦市民生委員・児童委員連絡協議会会長の笹谷月慧（ささや　つきえ）です。今日は、民生委員はどんなことをしてくれるのか、わかっていただこうと考えました。

みなさまの困りごと、お悩みなどの生活のご相談に耳を傾け、その解決のためにそうしたらよいのか、どうしたいのかを伺い、解決してくれるところへつなぐ役目をします。

直接的なこと、たとえば、金銭をあつかうこと、買い物、銀行、急病時に病院へ、などはできませんが、自分の受持ち地区内の情報を把握して、必要な連絡先につなげるというような、中間的なところでお役に立つようにしています。どんなちいさなご相談も「ものは試し」で話してみてください。「知られるのは嫌！」との思いもあることはよく分かりますが、私たちにとって守秘義務は絶対的なものです。信じていただきたいと思います。訪問して知り得た情報やお悩み、困りごとを他へ話すことはありません。

他人の民生委員のほうが話しやすい方もいらっしゃいます。また、近所の民生委員よりは、違う地区の民生委員の方が話しやすい場合もあるでしょう。違う地区であってもお話は伺います。どうぞお話ください。私たちのできないことはご近所の力で見守って助け合ってほしいと願っていますが、ま

ずは、なんでも話していい人、相談できる人が私たち民生委員だと思ってください。お役に立とうと思っています。市内には、80 人以上の民生委員と、子どものことに係ることを中心にしている主任児童委員さんもおりますので、大人のことでも子どものことでも、どちらにも役立つと思います。お気軽に話してください。

3　熊谷末男（三浦市老人クラブ連合会会長）

三浦市老人クラブ連合会の熊谷でございます。

三浦市老人クラブは、通称「ゆめクラブ三浦」と呼んでおります。

三浦市老人クラブの概要について申し上げますと、昭和36年２月２日に設立し、現在は34クラブ、1,256 人の会員です。三浦市における老人クラブの加入率は、平成 26 年７月１日現在で 6.4%です。

老人クラブの活動は、会員の話し合いによって、それぞれの地域ごとに多種多様な活動を行っておりますが、大きく分類すると、「生活を豊かにする楽しい活動」、「地域を豊かにする社会活動」に大別されます。

「地域を豊かにする社会活動」の中に「在宅福祉を支える友愛活動」がありますので、「在宅福祉を支える友愛活動」についてお話いたします。

長寿社会は大変喜ばしいことですが、高齢化とともに「寝たきり」や「一人暮らし」等、家族の核家族化やプライバシー保護ということから、家族や地域では個々の人々の結びつきや、ましてや「お互い様」等という隣近所が相互に支える力が弱くなってきている現状です。

このような時代に、せめて高齢者同士は、お互いに同じ世代を生きてきた仲間として、理解し、助け合い、支え合って、高齢になっても安心して暮らせる社会の実現に向け「友愛活動」が生まれ、三浦市老人クラブにあっても「みんなで見守る地域社会」をめざすため「友愛チーム」を結成し、高齢者の見守り活動を行っております。

友愛活動は、

① 同じ高齢者の仲間の生活や心の支えとなること
② 友愛チーム活動は、安心・安全・ぬくもりの地域社会づくりとなっていくこと
③ 活動するチーム員の健康と生きがいにつながっていること

等です。

友愛チームの活動の例ですが、

① 話し相手・相談相手（地域情報、老人クラブの活動の話、趣味の話、生活の知恵や心配ごとの相談、行政等の情報提供等）
② 簡単な生活支援（対象者の希望にそってできる範囲で行う。例えば、買い物、移送、庭木の手入れ、簡単な家具の補修等）
③ 囲碁・将棋等ゲームの相手

等です。とにかく「良い話し相手になること」が第一です。

友愛チームの構成は、単位クラブ、あるいは複数の単位老人クラブなど、地域の実情に合わせクラブ会員及び趣旨に賛同する関係者（民生・児童委員、ボランティア、その他協力者）おおむね６人をもって構成し、老人クラブ会員が代表者となり、対象者は１チームおおむね３人を対象とします。三

浦市老人クラブでは、現在３チームが活動しております。対象者からは、「高齢で独り暮らしになっても安心だ」と言われております。

老人クラブ活動の一部についてお話ししましたが、高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるには、老人クラブの会員だけでなく、近隣住民の理解と協力が欠かせないわけで、その点よろしくお願いいたします。

４　髙橋米子（訪問介護　ロード　管理者兼サービス提供責任者）

みなさんこんにちは、訪問介護ロードの髙橋まいこと申します。

なぜ私が壇上にいるかと申しますと、兒玉末先生に詫びても詫びてもしきれないほど失礼な言い方をしてしまったのです。電話のやり取りで兒玉末先生とは知らず、「尿管の入れ方がちゃんとしていなかったのではないですか」、「血尿も出ているし、尿も少ないですよ」と言ってしまったのです。

１０分後、利用者さんの家にあわてて兒玉先生が来ました。「大丈夫ですよ。腹水も溜まっていないですよ。ご安心ください。」と言われたのです。

そんなわけで、兒玉末先生には、たかがヘルパーの分際で何を言っているの、直接は言いませんが悪いイメージで忘れもしないヘルパーになったわけなんです。

さて、三浦市訪問介護事業所は現在、１３か所の事業所があります。どの事業所もお忙しいようですね。

安倍内閣総理大臣は、「最期の看取りは自宅で介護しながら看取りなさい。」と国の方針を出されました。安倍さんに「なぜ自宅なのですか。」と聞きました。一言「コストが一番安いからですよ」と返事がきました。嬉しいですね。会社を経営している私にはもっともっと在宅の重要性を国会で話していただき、在宅ヘルパーの重要性をたくさん話してくださいと願う１人でもあります。

でも問題がありますね。ヘルパーさんが少ないことです。

責任者は今仕事に追われていますね。机の上には書類の山で、どこから手を付けたらいいのか、休日返上で処理していくわけです。ケアマネから仕事の依頼が来ると、何も考えずに「大丈夫ですよ」と受けてしまうんですね。ほんとうは全然大丈夫ではないのですが・・・どういうわけかケアマネに「大丈夫です」と返事をしてしまうのですね。

「さー、どうしよう、どうしよう」と悩んでいながら、なんとかこなしているのが不思議なんですが・・・

いろんな職種がありますが、在宅介護は、一番利用者さんに関わりが多いので、心から接することができますね。在宅介護の仕事は楽しいですね。なぜ楽しいか？いろんな利用者さんとの関わりを持つからです。毎日が何か問題があり訪問しますね。もちろん介護保険以外での訪問は日常的です。やれ電気がつかない、テレビが壊れた、生活援助の訪問が多いでしょうか。身体介護は訪問看護ステーションに任せられますので。

ヘルパーさんは偉いですね。会社に言いたいことがあっても、ひとことも言わないですね。私が困ることを知っているからです。そんななかで、ヘルパーさんの笑顔には救われますね。会議で難しい顔をされているヘルパーさんでもどうでしょう？利用者さんの前では笑顔ですね。時折「すごいな、こんな笑顔ができるんだ」とあらためて感心することがあります。

今度、ヘルパーさんを見ていてください。笑顔がみんな素晴らしいですから。

最後に私には目標があります。マザーテレサさんが大好きです。マザーテレサさんのように道端で亡くなっていく人を抱き上げて看取ることです。誰にも優しくできる「心」です。

終末期の介護は、何回も経験してきました。利用者さんの手を握り、本人に小さな声でささやくのです。「私がそばにいます。ご安心ください。」と。利用者さんは「ありがとう」と言ってくれます。ありがとうの言葉でなぜか涙が出ます。その時ばかりは介護の仕事をしてきてよかったと思うのです。

そおっと声掛けするのです。

ありがとうの言葉は、あなたではなく、私があなたに出会えて仕事をさせていただいたことに「ありがとう」なんですと。

ありがとうございました。

5　ディスカッション

＜コーディネーター・永井さん＞

みなさん、ありがとうございました。地域コミュニティの中心として、在宅療養のキーパーソンとしてご活躍のみなさまの日頃が、目に浮かぶような、心に響くお話でした。

どうもこれからの超高齢社会には、こうした人たちのつながりが不可欠のようですが、なぜつながりが必要なのか、行政の意見、ポイントを、澤口さん、教えていただけますか。

＜澤口さん＞

全国的な傾向ですが、高齢者お一人の世帯（独居）やご高齢のご夫婦だけの世帯（老々）が増えており、高齢化率も伸びてきて、本市の高齢化率は10年後に40%を超え、医療や介護の専門職だけでは高齢者を支えられないときがきます。そのときは、地域のみなさまのお力、みんなで見守る地域社会が必ず必要になると考えています。

＜コーディネーター・永井さん＞

みんなで見守る地域社会の中で、在宅医療はますます重要性を増していますが、市立病院にあって、兒玉先生のご奮闘の様子はいろいろと伺っておりますが、現状でお困りのことなどはありますか。また今後、どのような展開をされようとお考えですか。

【兒玉先生がお話しようとしたとき、会場からおおむね次の内容の発言があった。】

病院を退院して自宅に帰るとき、おむつの交換の仕方を十分に教えられず、十分な面倒を見られなかった。そういうことをきちんと教えてもらわないと困る。

【さっそく兒玉先生がなだめるように優しく、率直かつ真摯な態度で説得（発言者とは旧知の仲）。】

＜兒玉Ｄｒ．＞

自分がご主人の主治医で、状況もよく知っていますが、おむつ交換の方法がうまく伝わらなかったのかもしれませんね。でも、市立病院も今はいろんな人が連携して、ずいぶんよくなっていますよ。

【発言者の興奮が若干収まる兆し。そこにすかさず安藤さんが、諭すように説得力のある口調でフォロー。】

＜安藤さん＞

市立病院で退院支援をしていますが、その当時、退院前の説明不足があったのかもしれません。それでも今は、医師や看護師や相談員が退院のずいぶん前から、退院後にご自宅でしっかりと生活ができるように、ご本人やご家族にしっかりとご指導させていただいています。

【兒玉Ｄｒ．や安藤さんの発言と会場のお知り合いの訪問看護師さんの説得で、発言者も落ち着つきを取り戻す。】

※　思わぬハプニングだったが、老々介護を取り巻く医師、相談員、看護師ほかの連携「みんなで見守る地域社会」の典型をみたようで、このシンポジウムの趣旨にふさわしい出来事だった。

＜コーディネーター・永井さん＞

会場から現場の生のお声をいただきました。在宅療養、介護でお困りのみなさまのご苦労が伺えますが、もっとも身近で高齢者と接しながら、介護の教室なども開催されている福島さん、現場のご苦労について、どのように思われますか。

＜福島さん＞

独居や老々のご家庭はたいへんです。

地域包括支援センターでは、十分ではないかもしれませんが、介護教室などを開催し、介護方法の指導をすることで、こうした方たちのご負担を少しでも軽くすることができたらいいなぁと考えています。

介護教室の充実などにも努力したいと思っています。

＜コーディネーター・永井さん＞

介護を必要としている人たちの家庭の状況はさまざまだと思いますが、吉本さん、ケアマネージャーさんとしてそのあたりのご苦労はいかがですか。

＜吉本さん＞

在宅療養のむずかしさは、介護を必要としてる方のご家族やご家庭の状況によって大きく違っています。私たちが在宅で介護をする場合には、まず介護を積極的にできるご家族を探します。しっかりと介護ができる、特に若い方がいらっしゃる場合には、ケアプランを作るのもスムーズにいくケースが多いので助かります。でも、そうでない場合が多く、その場合は、私たちケアマネが持っている情報が役立つと思います。私たちケアマネは、いろいろな介護事業所の情報を持っていますので、介護が必要な人やそのご家族と介護をする人たちを繋いでいくコーディネーターの役割をとおして、お役に立ちたいと考えています。

６　＜エピローグ＞永井雅子（神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センター所長）

みなさん、お隣の人と触れないように手と手をかざしてみてください。

温もりを感じますか？

手を握らなくても、手と手を近づけると、お隣の方の温もりが感じられると思います。この温もりを感じられる距離感が大切なのではないでしょうか。手を握ることは、踏み込みすぎてしまって嫌がられることがあるかもしれません。でも、手を握らなくてもお互いの温もりが感じられる距離をずっとずっと保ち続けること、それが今日のテーマにふさわしい「おせっかい」のかたちかもしれません。

みなさんも一緒に考えてみてください。そしてご一緒に「みんなで見守る地域社会」をはぐくんでいきましょう！！

ご協力ありがとうございました。司会にお返しします。

Ⅵ　質疑応答概要

パネルディスカッションの後、司会者の案内で、会場から質問を受け付け、お答えをした。その概要は、次のとおり。

司会者から会場内に質問を促す

【ご質問１】

民生委員をしていますが、民生委員は、介護の必要な方におむつの配達もしています。先日初めて伺った配達先で、「これまで会費を払ってきたが、自分がおむつの配達をしてもらうようになって、たんへん感謝している。」というお話をいただき、たいへん嬉しく思いました。そうした普段の仕事で困ったときは、今日お話をいただいた方にも相談をさせていただいていますが、いつもすごく助かっています。また、今日もいろんな人がいろんなご活躍をされていることをあらためて知り、心強く感じました。これからも頑張ってください。

※　お答えは求められていませんが、会場は温かい拍手に包まれました。

【ご質問２】

これから高齢化がますます進むと、「在宅看取り」ができる環境が必要だと思いますが、多くの医師は在宅で診るのではなく「病院に来てください」と言われます。訪問診療や在宅看取りを拡充しようとする流れと逆行しているように思いますが、どのようにお考えですか。

【お答え】（三浦市立病院内科医師・地域医療科担当医長　兒玉末）

おっしゃるとおり、これから「在宅療養」や「在宅看取り」はたいへん重要で、その環境を作っていくことが必要だと思います。ただ、医師の中にもいろいろな考えがあって、訪問診療や在宅看取りを積極的にやろうという医師が残念なことに少ないのも現実です。

病院で受け入れる必要がある人もたくさんいらっしゃいますので、いろいろな選択肢があっていいとは思いますし、市立病院は、患者さんや患者さんご家族が、在宅も入院も選べるような体制をつくっていきたいと考えています。

そしてこれからは、訪問診療や在宅看取りの必要性はますます大きくなっていきますので、微力ですが、医師の間にもそうした意識を持ってもらうような働きかけを続けていきたいと思います。

Ⅶ　閉会

最後に、三浦市立病院総病院長　小澤幸弘（おざわ　ゆきひろ）の閉会のことばで、「在宅療養を考える集い」～おせっかいのすすめ～を締めくくった。閉会の言葉の概要は次のとおり。

【閉会のことば】

三浦市立病院の小澤です。本日は、お忙しいところ、このように多くの方にお集まりいただき、誠にありがとうございます。

昨年の「在宅看取りを考える」～みんなで考える～シンポジウムに続き、本日は「在宅療養を考える集い」と銘打ち、「おせっかいのすすめ」をテーマに、リレー講演というかたちで、在宅療養のキーパーソンたちのお話を聞いていただきました。また、パネルディスカッションでは、いろいろな職種の方にお集まりいただき、在宅の現状をお話いただきました。

三浦市は、極めて高い高齢化率の超高齢社会ですが、三浦市立病院は、そうした中でも安心して楽しく暮らせるまちをつくるためにお役に立とうと思っています。これまでも周辺の病院よりもいち早く在宅療養の重要性を認識し、それに向けた体制作りに取り組んできました。そしてこれからも、福祉や介護との連携を強め、在宅療養の拡充に向けた取組を続けていきます。

「みんなで見守る地域社会」は一朝一夕にできるものではありませんし、病院だけでできるものでもありません。市立病院ももちろん全力で取り組みますが、今日お集まりの介護職のみなさん、行政、そしてなにより市民のみなさまのお力が必要です。

みなさん、「みんなで見守る地域社会」をはぐくみ、地域包括ケアシステムを充実させ、安心して楽しく暮らせるまちをご一緒につくろうではありませんか。

そのことをお願いして、本日のシンポジウムにご参加いただいたみなさまへの御礼のあいさつといたします。本日はありがとうございました。

＜THE　END＞

熱弁の小澤総病院長

Ⅷ　アンケート結果

１　司会者が直接会場の観衆に問いかけるアンケート

本日のテーマは「在宅療養を考える集い」であるが、開会時と閉会時に来場者全員に２つの質問を投げかけ、「老後の不安」と「療養場所」に関する意識とその変化を調査した。

調査方法は、司会者の２者択一の質問に対し、プログラムの表か裏をステージに掲示する方法で、スタッフが表と裏の数をそれぞれカウントして集計する方法を用いた。

質問にお答えいただいた会場の様子

プログラム掲示の見本を示すスタッフ

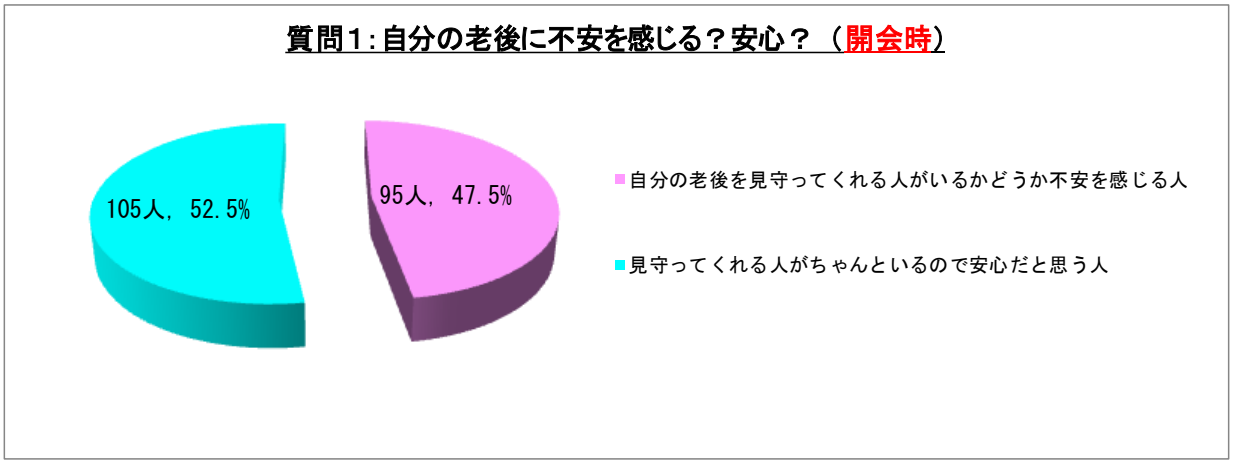
まるで野鳥の会のようにプログラムの表（ピンク）の数と裏（ブルー）の数をカウントするスタッフ

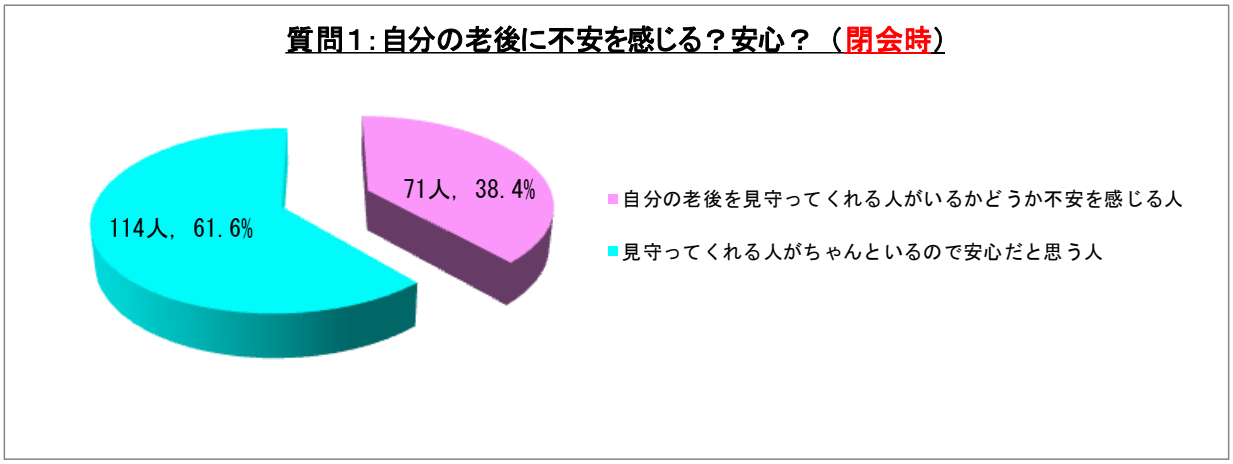
質問１は、

ご自分の老後を見守ってくれる人がいるかどうか不安を感じると思われる方は、プログラムの青色のほうをステージにお見せください。いや、見守ってくれる人がちゃんといるので安心だと思われる方は、ピンク色のほうをステージにお見せください。

結果は次のとおり。

質問項目		開　会		閉　会		差　引	
		回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
質問1	自分の老後を見守ってくれる人がいるかどうか不安を感じる人	95人	47.5%	71人	38.4%	△ 24人	△ 9.1
	見守ってくれる人がちゃんといるので安心だと思う人	105人	52.5%	114人	61.6%	9人	＋ 9.1
	計	200人	100.0%	185人	100.0%	△ 15人	＋ 0.0





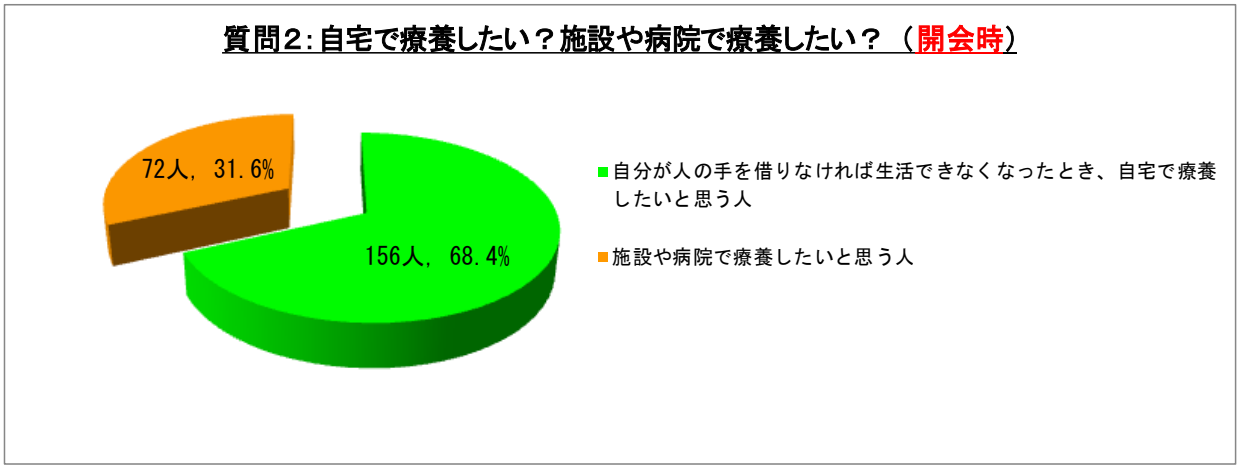
このとおり、ご自分の老後に不安を感じる人が、開会時に比べ閉会時に9.1ポイント減っていることが分かる。このシンポジウムの目的が、～おせっかい～をすすめ、～みんなで見守る地域社会をはぐくむ～であることを考えると、高齢者を取り巻くさまざまな人たちのさまざまな日頃の活動を知っていただき、ご自分の老後の不安を少しでも払拭することに寄与できたと推察される。このことは、一定の評価ができるものと認識するが、そこで満足することなく、福祉と医療と介護に携わる人たちと市民の力により、連携を強めるための今後の継続した一層の努力の必要性をあらためて認識するところである。「継続は力」を肝に命じ、超高齢社会における高齢者の不安の払拭に努めて参りたい。

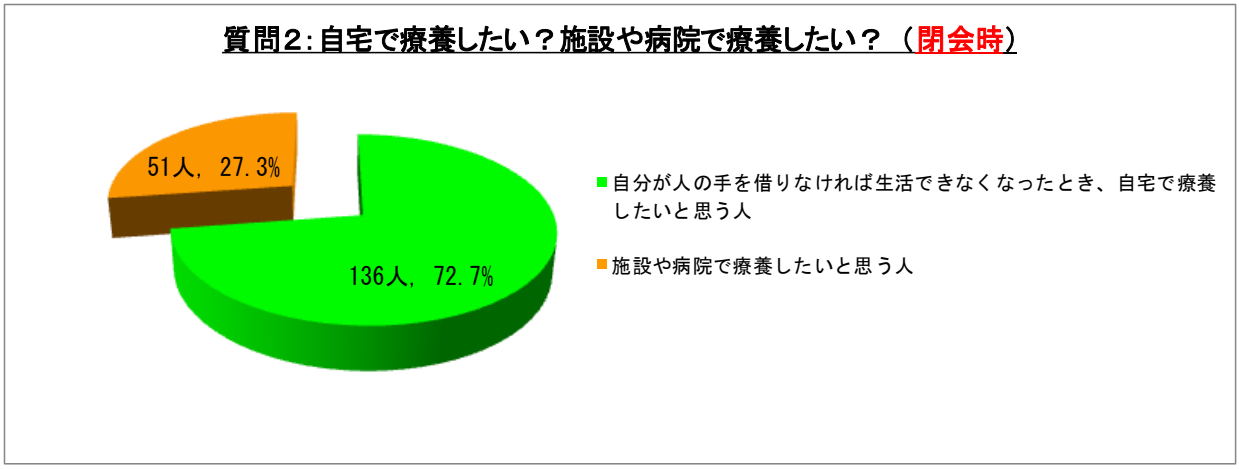
質問２は、

ご自分が病気や高齢などの理由により人の手を借りなければ生活できなくなったとき、どこで療養したいと思いますか。ご自宅で療養したいと思われる方は、プログラムのピンク色のほうをステージにお見せください。施設や病院で療養したいとと思われる方は、青い色のほうをステージにお見せください。

結果は次のとおり。

質問項目		開　会		閉　会		差　引	
		回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
質問２	自分が人の手を借りなければ生活できなくなったとき、自宅で療養したいと思う人	156人	68.4%	136人	72.7%	△ 20人	＋ 4.3
	施設や病院で療養したいと思う人	72人	31.6%	51人	27.3%	△ 21人	△ 4.3
	計	228人	100.0%	187人	100.0%	△ 41人	＋ 0.0





このとおり、ご自宅で療養したいと思われる人が圧倒的に多いこと、さらには、ご自宅で療養したいと思われる人が開会時に比べ閉会時に4.3ポイント増えていることが分かる。このことは、三浦というまちが「おせっかい文化」の残る住みやすいまちであること、さらには、このシンポジウムの成果として、若干ではあるが、在宅で安心して療養できるという意識が増したことが伺える。

しかし一方で、この若干の意識の変化では、超超高齢社会を乗り切る力として不足であり、市民の間に「在宅療養」に対する不安の払拭のための医療と介護の体制の整備、地域包括ケアシステムの拡充をスピード感を持って行い、在宅療養に対する市民の不安の払拭のための方策を積極的に行うことが肝要であるとあらためて認識するところである。

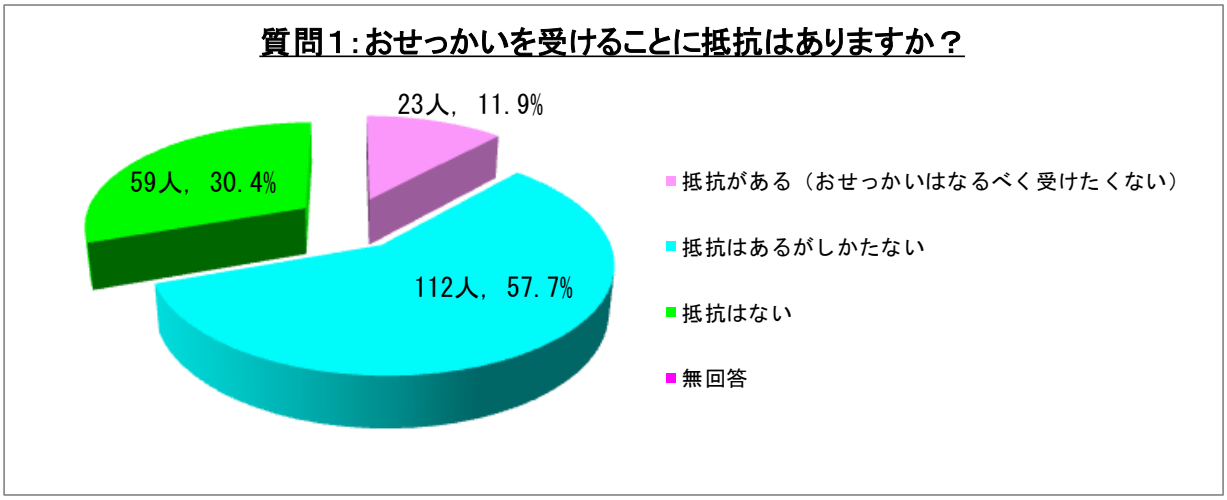
2　事前準備した用紙によるアンケート

受付で来場者にアンケート用紙を配布し、お帰りの際に回収した結果が次のとおりである。

回答者数は194人で、来場者数を300人とすれば回答率は64.7%で、昨年の回答率が71.9%だったことを考えると、回収率が落ちた原因分析と対策が必要であると思うが、194人の来場者から回答が得られたことは、貴重なデータであると考えていいと思われる。

また、それぞれの結果は、他のまちの同じアンケートの結果と比較することによって、正しい評価ができると思われるので、今後、ほかのまちのデータを探し、評価をしてみたいと思う。

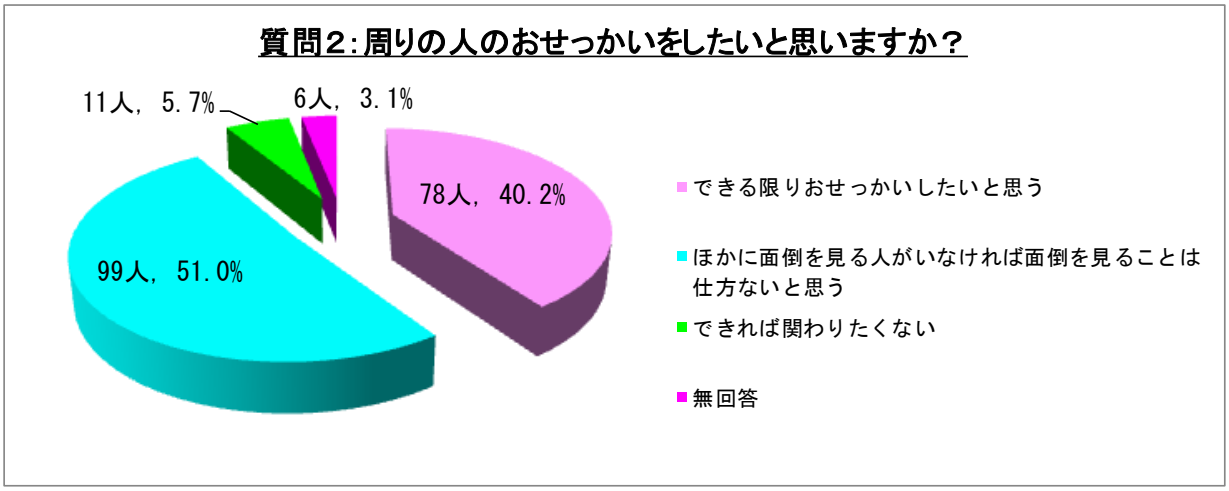
質問１	ご自分が人の手を借りなければ生活できなくなったとき、おせっかいを受けることに抵抗はありますか？どれかひとつにチェック☑をしてください。	回答数	構成比
回答	抵抗がある（おせっかいはなるべく受けたくない）	23人	11.9%
	抵抗はあるがしかたない	112人	57.7%
	抵抗はない	59人	30.4%
	無回答	0人	0.0%
	計	194人	100.0%



質問１の結果では、「抵抗がある」及び「抵抗があるがしかたない」とお答えの人が135人、69.6%で、老後に面倒を見てもらうこと（おせっかいを受けること）に抵抗がある人が多数であることが裏付けられる。しかしこの結果は、予想を下回るものであり、「おせっかい文化」の残る本市のあたたかさを象徴しているものと考えられる。

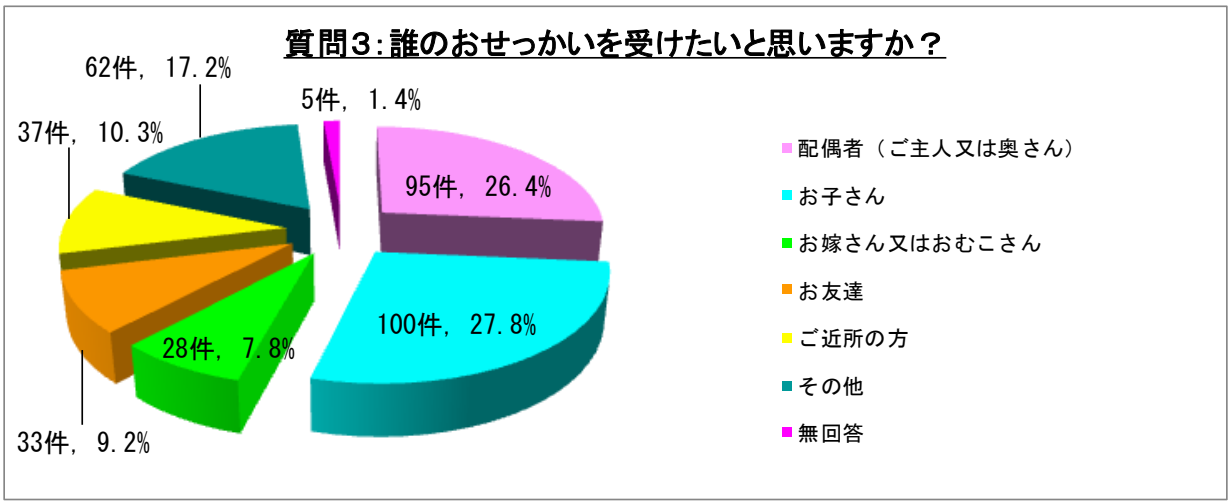
また、「抵抗があるがしかたない」及び「抵抗はない」とお答えの人、つまりご自分の将来、ほかの人に頼ることを想定されている人が171人、88.1%で、圧倒的である。当然の結果であると思われるが、そのためにも「地域包括ケアシステム」の拡充、「みんなで見守る地域社会」の実現が急がれると認識すべきであると思われる。

質問２	周辺（ご家族やご近所）に人の手を借りなければ生活できない人がいる場合、ご自分がお元気なうちはおせっかいをしたいと思いますか？どれかひとつにチェック☑をしてください。	回答数	構成比
回答	できる限りおせっかいしたいと思う	78人	40.2%
	ほかに面倒を見る人がいなければ面倒を見ることは仕方ないと思う	99人	51.0%
	できれば関わりたくない	11人	5.7%
	無回答	6人	3.1%
	計	194人	100.0%



質問２の結果では、「できる限りおせっかいをしたいと思う」及び「ほかに面倒を見る人がいなければ面倒を見ることは仕方ないと思う」とお答えの人が 177 人、91.2%で、世話をやくのが好きな人、世話をやける人が圧倒的多数である。「みんなで見守る地域社会」をはぐくむに十分な市民意識（おせっかい文化）が現存していることが裏付けられる。

質問３	人の手を借りなければ生活できなくなったとき、おせっかいを受けるとすれば、誰のおせっかいを受けたいと思われますか？該当するものにチェック☑してください。複数チェック☑も可です。	回答数	構成比
回答	配偶者（ご主人又は奥さん）	95件	26.4%
	お子さん	100件	27.8%
	お嫁さん又はおむこさん	28件	7.8%
	お友達	33件	9.2%
	ご近所の方	37件	10.3%
	その他	62件	17.2%
	無回答	5件	1.4%
	計	360件	100.0%

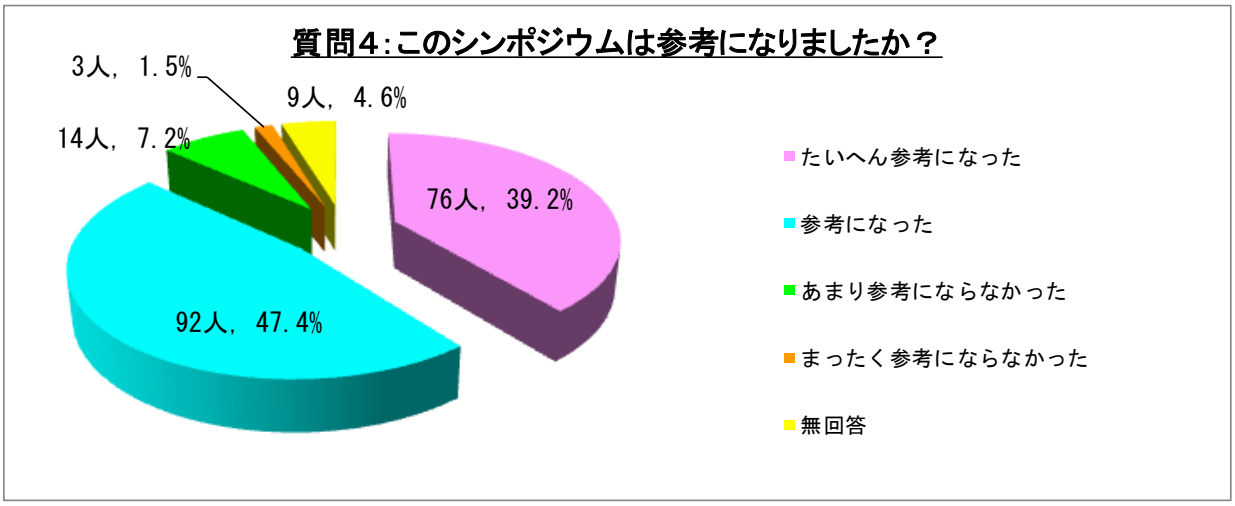


質問３の結果では、配偶者、お子さん、お嫁さん又はおむこさんなど、ご家族に将来面倒を見てもらうことを願う人（件数）が 223 件、61.9%で、多数であり、当然の結果であると言える。

一方で、お友達やご近所の方とお答えの人が 70 件、19.4%であり、予想を上回る結果と言える。この結果も是非ほかのまちと比較をしてみたいが、血縁でない人のお世話になれる人情が残るまちである証しであると言っても言い過ぎではないと思われる。

また、「その他」の回答は、アンケート用紙に注釈を書いていただいた人が相当数おり、ご兄弟（姉妹）という回答が多かった。

質問４	このシンポジウムは参考になりましたか？どれかひとつにチェック☑をしてください。	回答数	構成比
回答	たいへん参考になった	76人	39.2%
	参考になった	92人	47.4%
	あまり参考にならなかった	14人	7.2%
	まったく参考にならなかった	3人	1.5%
	無回答	9人	4.6%
	計	194人	100.0%



最後の質問４の結果では、「たいへん参考になった」と「参考になった」を合わせて 168 人、86.6%であり高い数字であるが、昨年のシンポジウムでは「たいへん参考になった」と「参考になった」を合わせて 95.0%であったことを考えると、もろ手を挙げて歓んでいられない数字であると考えるべきである。

「地域包括ケアシステム」の拡充、「みんなで見守る地域社会」の実現には、福祉、医療、介護の専門職の力はもちろん、市民の力が不可欠であり、その力を結集するための市民向け啓発活動は、これからも不断の努力が必要だと思われるが、今後も工夫し、市民の心を動かし、市民の心をつかむイベントに心がけていきたいと考える。

Ⅸ　編集後記

厚労省は、効率的かつ質の高い医療提供体制を構築するとともに、地域包括ケアシステムを構築することを通じ、地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するため、平成27年度以降において、医療法、介護保険法等の関係法律について所要の整備等を行うとしています。本市は2025年問題を先取りしていますが、医療と介護の連携強化の動きに拍車がかかっている現状について、危機感を持たざるを得ません。

本市においても、平成24、25年度の２年間に亘り行った「三浦ならでは」の高齢者医療・介護連携のための調査研究事業[注1]、「在宅看取りを考える」～みんなで一緒に考える～シンポジウムの開催など、医療と介護の専門職相互に「顔の見える関係」をつくるとともに、在宅看取りや在宅療養に関する市民意識に一石を投じる取組を行って参りました。今年はこれに引続き「在宅療養を考える集い」と称し、リレー講演をお願いした在宅療養の現場で奔走するキーパーソン５人と地域で日々高齢者を見守る３人に加わっていただき、「おせっかいのすすめ」、「みんなで見守る地域社会をはぐくむ」の２つのテーマでシンポジウムを開催させていただきました。

昨年３月15日（土）に開催した「在宅看取り・・・」に比べると、来場者数の減少や満足度の減少が認められます。天候が悪かったこと、タイトルのインパクトが前回に比べやや足りなかったことなどが主たる原因ではないかと思われますが、在宅療養についてみなさまとご一緒に考える機会を設けることは今後も継続し、より質の高いものとし、多くの方のご参加をいただけるよう、工夫したいと思います。

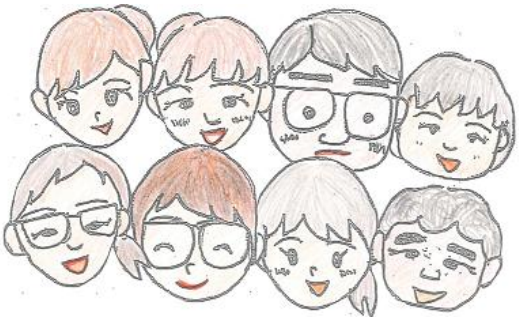
この反省とは別に、今回のリレー講演の５名の講師のみなさまやパネルディスカッションからご参加いただいた３名の方のお話は、企画段階で考えた「みんなで見守る地域社会の「みんな」に集まってもらい、現場の生の声をお伝えしよう。」という意図を見事に成就したものと自負しています。当日マイク越しに聞こえてくる生の声に「現場の重み」を伝える力をひしひしと感じ、心が熱くなるものでした。その気持ちは、この報告書を編集する際、みなさまの当日のご発言の記憶をたどる中でますます増幅いたしました。来場者のみなさまにもきっと伝わるものがあったと存じますし、その確認のためにこの報告書をご活用いただければ幸いです。

本市の地域包括ケアシステムを構成する様々な人々にも、同じようなお力をお持ちの方がたくさんいらっしゃいます。こうした人たちの手と手をつなぎ、地域包括ケアシステムの輪をさらに確かなものとすること、そうした人々の活動を広く市民みなさまにご理解いただき、地域社会の中の「おせっかい文化」を大切にしながら「みんなで見守る地域社会をはぐくむ」ことに、微力ながら不断の努力をお約束いたします。

シンポジウム終了後、能登から三浦に移り住んでいらっしゃるご夫婦から「昨年に続き今日のシンポジウムを聴き、将来は能登に帰ろうと思っていたけど、みんなが見守るあったかい三浦に住み続けたい。」という感想をいただきました。スタッフ冥利に尽きるお言葉をいただき、歓喜に涙があふれる思いです。あったかい住みやすいまち三浦、“ライフ・サポート・タウン”と言うべきでしょうか…その実現のため、精進して参ります。

最後に、このシンポジウムに共催をいただいた三浦市医師会及び神奈川県鎌倉保健福祉事務所三崎センターを始め、様々なお立場でご理解ご協力をいただいた神奈川県保健福祉局保健医療部医療課、三浦市区長会、三浦市老人クラブ連合会、三浦市民生委員・児童委員連絡協議会、介護事業所等々のみなさまに衷心より御礼申し上げますとともに、今後とも、あったかい住みやすいまち三浦、“ライフ・サポート・タウン”の実現に共にご尽力賜りますようお願い申し上げ、編集後記といたします。

平成27年３月



三浦市立病院地域医療科スタッフ

注1　：「三浦ならでは」の高齢者医療・介護連携のための調査研究事業
報告書はこちらをご覧ください。http://www.city.miura.kanagawa.jp/byouin/shomu/kaigorenkei.html

在宅療養を考える集い

～おせっかいのすすめ～

～みんなで見守る地域社会をはぐくむ～

報　告　書

平成27年３月23日

事業主体：三浦市
主　　管：三浦市立病院
編　　集：三浦市立病院地域医療科
発　　行：三浦市保健福祉部高齢介護課
〒238-0298
三浦市城山町１－１
TEL ： 046-882-1111（代表）
Email ： hoken0201@city.miura.kanagawa.jp